

キジルバシュのその後

—— 17-19 世紀オルムエ地方のアフシャール部 ——

近 藤 信 彰

はじめに

イラン史における 18 世紀を部族の再台頭 (resurgence) の時代と位置づけたのは A.K.S. Lambton であった⁽¹⁾。確かに 18 世紀に成立した 4 つの政権 (アフガン政権, アフシャール朝, ザンド朝, ガージャール朝) は部族出身であり, また, 18 世紀に各地で自立した地方勢力にも, 部族出身のものが少なからず認められる。サファヴィー朝後半と比較すれば部族の活動は盛んになっているように見える。

筆者は 18・19 世紀の地方勢力の分析を通じてイラン史の再構成を志しているが⁽²⁾, その場合どうしても避けることができないのが, 部族という問題である。この Lambton の見解に最も不満な点は, 「部族の再台頭」を強調していくと「部族」の内実を歴史的に検討することなしに時代による差異を極小化し, ゆえにイランの社会構造は前近代を通じて不変であるという議論に流れやすいという点である⁽³⁾。これに対しては 17 世紀以降部族の勢力は衰退に向かうとする J.J. Reid の見解, あるいはサファヴィー朝以降, 部族システムに修正が加えられたとする G.R. Garthwaite の見解がある⁽⁴⁾。しかし, G.R. Garthwaite の未公刊史料を駆使した Bakhtiyārī 族に関する詳細な研究にしても, 部族の近代における変容を明らかにすることには成功しているが, それ

以前の時代の彼の言う部族システムの修正を具体的に検証しているわけではない。なにより、R.Tapper が認めるがごとく、史料的制約もあり、部族に関する歴史的な研究があまりに少ないという現状がある⁽⁵⁾。

そこで、本稿では、17世紀以降イラン東北部アゼルバイジャンのオルミーエ Orūmiyye 地方とその周辺で活動していたアフシャール Afshār 部を取り上げ、彼らの歴史を明らかにしつつ、彼らの国家や地方社会との関係を分析を通じて、彼らの性格とその歴史的変容を考察したいと思う。

アフシャール部を取り上げた理由は、次節で詳述する史料事情を別にすれば、以下の通りである。第一に、アフシャール部はサファヴィー朝建設に軍事面で多大の貢献をしたキジルバシュと呼ばれるトルコ系の部族連合の一翼を担った重要な部族であり、また、18世紀にもアフシャール朝を建設するなど目覚ましい活躍を見せ、まさしく「部族の再台頭」を体現しているように見える部族であること。第二に、彼らが住地としたオルミーエ地方がエスファハーン、テヘランなど王朝の首都のおかれたイラン中央部から地理的に離れており、王朝から見た辺境部の地方勢力の事例としても検討しうることである。部族出身の地方勢力に関する事例を提供することも、本稿の一つのねらいである。

1. 史料『アフシャール史 (Tārīkh-e Afshār)』をめぐる

オルミーエのアフシャール部を研究するうえで不可欠の史料が、彼らが19世紀後半以降に自らの歴史を記した書物であり、ここでは仮に、『アフシャール史』と総称する。これまで、B.Nikitine と ‘Alī Dehqān がこの史料を用いてアフシャール部の歴史の概要を明らかにしているが⁽⁶⁾、概ね史料の要約にとどまっている。

本稿ではこの Tārīkh-e Afshār の校訂本⁽⁷⁾を用いた(略号 TAF)。著者 Mīrzā Rashīd Adīb al-Sho‘arā の序文によると成立の経緯は以下の通りである。

1250/1234-5 年, Najaf Qolī Khān の命により, 著者の親族の一人 Mowlānā Maḥmūd がオルーミーエのアフシャール部の歴史を著した。しかしこの書物は内容・文体とも欠陥があったため, 顧みられることがなかった。そこで, ナーセロッ・ディーン・シャー時代 (1848-96) に Yūsuf Khān Shojā' al-Dowle の命で, 著者がこの書を著した⁽⁸⁾。

まず, ここでアフシャール部の有力者の命によって, アフシャール部の著者によって書かれた史料であることが確認できる。Najaf Qolī Khān と Yūsuf Khān はアフシャール部のうちの Qāsemlū 族の有力者であり, 二人の著者は Maḥmūdlū 族である。また, この校訂本には 802/1399-1400 年から 1285/1868-9 年頃までの出来事が記されているが, 内容の疎密をみると 18 世紀後半から 19 世紀前半が最も詳しい。これは先の成立の経緯からして, Mirzā Rashīd が先達の Mowlānā Maḥmūd の著作を利用したことを示していると考えられる。

問題はこの校訂本と Nikitine, Dehqān が用いた写本との関係である。残念ながら写本そのものは入手できなかったため, 引用や内容から判断せざるをえず, 十分な検討はできないが, それでも興味深い事実が浮び上がってくる。

まず, Dehqān の用いた写本であるが, 著者は同じく Mirzā Rashīd であるとされ, Dehqān の記述の内容も概ね校訂本と一致する。しかし, Dehqān の引用する写本の序文は, 大筋は校訂本のもとの内容は似通っているが, 文言が全く異なっている。しかも, 校訂本にはない Mirzā Rashīd の著作開始の年が 1283/1866-7 年と明記されているのである⁽⁹⁾。また, 校訂本も, Dehqān の写本も最後が不完全なまま途絶しているが, Dehqān の写本の方が先の事件で終っており, その引用もまた校訂本の対応する部分と文言が大きく異なっているのである⁽¹⁰⁾。

次に Nikitine が用いた写本であるが, 彼の求めによりアフシャール部 Qāsemlū 族の Ḥājji Parvīz Khān Shehāb al-Dowle が 1917 年に記したものと

いう⁽¹¹⁾。校訂本とは著者も成立年代も異なるにもかかわらず、Nikitine の記した内容の大筋は校訂本にほぼ一致し、部分的な引用も対応している⁽¹²⁾。年代的には、校訂本同様 802/1399-1400 年にはじまり⁽¹³⁾、終りは校訂本より後の 1297/1879-80 年に及んでいるという。内容における大きな相違点は、Nikitine 本においてはティムール朝後期からサファヴィー朝前期の記述が欠落していることと、アフシャール部のオルミーエ移住の年代が異なっていることである。

以上のことから、この史料には内容の近いいくつかの異本が存在したことは確かである。文言や著者の不一致は、多くの著者、筆写者の介在をうかがわせるが、内容の類似性は、にもかかわらず、この歴史がこの多くの著者・筆写者に共有されていたことを示している。単に筆写のみならず、口承によって伝えられた可能性も考えられる。したがって、この史料はこの部族にある程度共有された主観的な歴史を記したという点で非常に貴重であるが、一方、より客観的な事実関係を知るためには他史料との厳密な比較検討を要するのである。Nikitine や Dehqān の研究はこのような点でも不十分であると言わざるを得ない。

2. オルミーエのアフシャール部の歴史

1. アフシャール部のオルミーエ移住

アフシャール部は、元来オグズ 24 支族の一つであり、他のオグズ諸族とともに 11 世紀に中央アジアからイランに移住してきた。アク・コユンル部族連合に加わったのち、16 世紀には、既に述べたように、キジルバシュの一つとして、サファヴィー朝国家の建設に貢献した。サファヴィー朝初期には、主にフーズスターン、Kūhgīlūye などイラン南部に分布していた⁽¹⁴⁾。TAF は、いかにアフシャール部がサファヴィー朝下で要職を占めたかを強調しているが、

これはサファヴィー朝期の史料からも確かめることができる。例えば、シャー・タフマースブ（位 1524-76）時代のアミールのリストには、7 名のアフシャール部出身のアミールが記載されており、皇子の師傅やケルマーン、Kūhgīlūye, Sāve 等の知事職についていたことがわかる⁽¹⁵⁾。

しかし、シャー・アッバース（位 1588-1629）による中央集権政策により、アフシャール部も他のキジルバシュ諸部族と同様、その勢力を削がれていくことになる。1592-3 年にケルマーン、1594 年に Shūshtar、1596-7 年には Kūhgīlūye と相次いで知事職を失い⁽¹⁶⁾、アッバースの即位から 3 人続いたアフシャール部出身のコルチバシ（近衛隊長）も、1591-2 年以降は見られなくなる⁽¹⁷⁾。このような状況で、アフシャール部のオルミーエ移住が行われるのである。TAF の伝えるところでは、その経緯は以下の通りである。

シャー・アッバース時代、Ṭahmāsb Soltān Īmānlū Afshār とその子 Qāsem Soltān は、Hamadān 方面の西部国境防衛の任にあたっていた。Qāsem Soltān はオスマン朝との戦争において軍功もたて、1032/1622-3 年にはモスルを攻略したが、その維持・防衛に失敗、逃走し、アフシャール部はシャーの不興をかってあらゆる知事職を罷免された。しかし、Qāsem Soltān の子 Kalb ‘Alī Soltān は、1035/1625 年、オスマン軍に包囲されて落城の危機にあったバグダードに弾薬を輸送するという軍功をたて、アフシャール部の過去の罪を償った。シャー・アッバースは、恩賞としてアフシャール部に封土（eqta‘）と居住地として望む土地を与えることとし、アフシャール部の希望通り、オルミーエを与えた。この結果、エラグ（イラン中央部）、ファールス、ケルマーン、ホラーサーンに暮らしていた 8000 家族（khānevar）のアフシャール部族が、オルミーエに移住した⁽¹⁸⁾。

この経緯を他の史料によって検証してみよう。同時代史料 TAA は Qāsem Soltān の対オスマン朝戦争での活躍、モスルの一時占領とその防衛失敗について TAF とほぼ同様の記述をしており、Kalb ‘Alī Soltān のバグダード攻

戦への参加も確認できる⁽¹⁹⁾。ただし、TAFに見られるようにこの父子をアフシャール部の運命を左右する部族を代表する人物とすることには、若干の疑問を持たざるをえない。別の同時代史料TAによれば、Qāsem Solṭānはフーズスターンの小都市Seymareの知事(hākem)にすぎなかった⁽²⁰⁾。また、TAAによれば彼がモスルの守備についたとき、彼自身の手勢はわずか300にすぎず⁽²¹⁾、辺境の一指揮官という印象を免れない。さらに、Kalb ‘Alī Solṭānは「Īmānlū族(tāyefe)とともに、モスルの城塞を失った失策により高貴なる方(シャー)の奉仕において過失の持ち主であった」⁽²²⁾。キジルバシュ諸部族の地位の低下を考慮にいれても、辺境の一指揮官にすぎない彼らが、Īmānlū族を代表していても、アフシャール部全体の運命を左右する人物であったかどうかは疑問である。

次に、Kalb ‘Alī Khān (Solṭān) がシャー・アッバース時代の末年にオルミーエの知事(hākem)に任命されていたことは、やはりTAAのシャー・アッバース時代のアミールのリストによって確かめることができる⁽²³⁾。さらにDehqānの研究にシャー・アッバースがKalb ‘Alī Khānにあてたとされる勅令が引用されており⁽²⁴⁾、TAFの記述を裏付けている。どれほどの数のアフシャール部族がどの地方から移住したかを他の史料から窺うことは困難である。しかし、前述のアミールのリストによれば、アフシャール部の知事はオルミーエのほか、わずかに二名しかおらず⁽²⁵⁾、アフシャール部にとっては重要なポストとなったと考えられる。そして、時代は下るが、18世紀に成立したサファヴィー朝の行政便覧では約2000人の兵力を擁することが記されており、Qāsem Solṭānの兵力をはるかに上回っている⁽²⁶⁾。さらに、19世紀初頭のヨーロッパ人旅行者の推計ではオルミーエはアフシャール部最大の居住地となっている⁽²⁷⁾。以上のことから、アフシャール部の移住に関するTAFの記述は大枠において信頼しうると考えてよいだろう。

さて、この移住の性格を考える上で見落としてはならないのは、TAFにお

いて「イクター」という語が用いられていることである。サファヴィー朝期の史料ではこれはトユール *toyül* という語にあたり⁽²⁸⁾、行政便覧ではアフシャール部の知事にすでに述べた約 2,000 人の軍隊の提供の代りに約 7,500 トマーンの税収が与えられ⁽²⁹⁾、部族の生計に寄与したことは疑いない。しかし、TAF が述べるような単なる論功行賞よりも、むしろ、シャー・アッバースの中央集権化政策の一環であったと考える方が妥当であろう。すなわち、反抗的な諸部族を中央から遠ざけてオルミーエという辺境に移住させ、国境防衛にあたらせたのである⁽³⁰⁾。TAF において、アフシャール部がシャー・アッバースに対してオルミーエを望む理由として、オスマン朝との戦争とクルド系諸族の略奪行為により、この地方が荒廃していることを挙げていること⁽³¹⁾は、これを裏付けている。

さて、以上のようにアフシャール部はオルミーエ地方に移住させられたのであるが、Qāsem Solṭān がフーズスターン地方の Şeymare の知事として国境防衛にあたっていたことを考えると、部族の規模はともかく、彼らの任務は移住以前と本質的に変わらないことになる。もし異なる点があるとすれば、彼らがサファヴィー朝滅亡までの約百年の長きにわたって、オルミーエの知事職をほぼ独占したことである。表 1 は TAF により作成したサファヴィー朝期のオルミーエ知事一覧である。Nikitine や Dehqān のリストと若干の異動があるが、ほとんどがアフシャール部の出身であることにはかわりがない。

残念ながら、このうち同時代史料で確認できるのはにごくわずかである。以下に箇条書きで示そう。

① Kalb ‘Alī Khān

1043/1633 シャー・サフィーの Van 遠征に参加⁽³²⁾。

1057/1647-8 (オルミーエと Farāh の知事)

シャー・アッバース二世のカンダハール遠征に参加し、戦死⁽³³⁾。

表1 TAFによるサファヴィー朝時代のオルムーミエ知事

年 代	任 命 者	知 事 名	出 自	備 考
1035/1624-5	Shāh 'Abbās	Kalb 'Alī Khān	Afshār/Imānlū (図1)	
1043/1633-4	Shāh Šafī	Ganj 'Alī Khān	Afshār/Imānlū (図1)	
1052/1642-3	Shāh 'Abbās II	Moḥammad 'Isā Khān	Afshār/Imānlū (図1)	
?	Shāh 'Abbās II	Shāh Verdī Khān	Afshār/Imānlū (図1)	
?	Shāh 'Abbās II	Ganj 'Alī Khān II	Afshār/Imānlū	
[Moḥammad 'Isā Khān II	Afshār/Imānlū	× Dehqān, Nikitine
1077/1655-6	?	Silspūr Khān Jalālī	オスマン朝からの亡命者	Nikitine では再任扱
1088/1677-8	Shāh Soleyman	Emām Virdī Khān	Afshār	Dehqān のみ]
?	Shāh Soleyman	Faḡl 'Alī Khān	Afshār/Imānlū	× Nikitine
?	Shāh Soleyman	Sobhān Virdī Khān	Afshār	
1119/1707-8	Shāh Solṭān Ḥoseyn	Khodādād Khān	Afshār/Qāsem lū (図2)	× Dehqān
1134/1722	Shāh Solṭān Ḥoseyn	Moḥammad Qāsem Khān	Afshār/Qāsem lū (図2)	

備考の×は不記載を示す。

□の列はNikitine, Dehqānで補ったもの

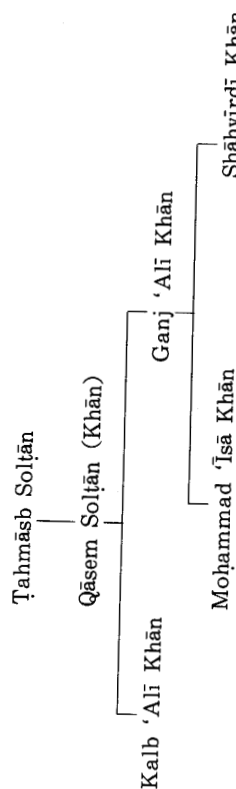


図1 TAFによるQāsem Solṭānの家系図

② Ganj ‘Alī Khān (Qāsem Solṭān の孫)

1066-7/1656-7 (オルーミーエの知事)

アフシャール部の訴えにより、知事を解任される⁽³⁴⁾。

③ Moḥammad ‘Alī Khān (Qāsem Solṭān の子)

1066-7/1656-7 Ganj ‘Alī Khān の後任としてオルーミーエ知事に任命される⁽³⁵⁾。

1073-4/1663-4 Farāh の知事に任命される⁽³⁶⁾。

表1および家系を示した図1とは人物関係・年代ともかなりのずれがあるが、内容の最大の相違はTAFがサファヴィー朝の東部国境方面の事績について全く触れていない点である。Kalb ‘Alī Khān と Moḥammad ‘Alī Khān が現アフガニスタンの Farāh の知事に任命されている事実は、少なくともこの時点まで、アフシャール部の活動がオルーミーエに限定されていなかったことを示している。

表1の他の知事については、最後の Moḥammad Qāsem Khān (後述)を除いて残念ながら検証のすべがない。しかしながら、18世紀に記されたサファヴィー朝の行政便覧に「オルーミーエ地方とアフシャール部の知事 (ḥākem-e olkā-ye Orūmī va īl-e Afshār)」のように記されていること⁽³⁷⁾から考えて、アフシャール部のものが数多くオルーミーエ知事となったこと、そして次第にオルーミーエとアフシャール部族が相互に関連づけられるようになったことは、確かであるように思われる。18世紀の年代記中にも Afshār-e Orūmī (オルーミーエのアフシャール部) とニスバで示される事例が現れることもこれを裏付けている⁽³⁸⁾。

2. 地方勢力への成長

18世紀に入ると史料が増えて、TAFの内容の検証もいくらか容易になる。表2は、この時期のオルーミーエ知事の一覧であるが、TAFの主な内容が他

の史料によってかなり裏付けられることがわかる。この表の任命者の欄が示すように、18世紀はさまざまな勢力が入り乱れて覇権を争う政治的に不安定な時代であり、オルミーエも例外ではなかった。しかし、アフシャール部はオルミーエの知事職を保持することにほぼ成功した。

この時期に新たに台頭したのは、Qāsemlū族の Khodādād Khān の家系であった(図2参照)。父 Moḥammad Beyg とともにクルド系諸族の反乱の鎮圧に軍功をたてた彼は、1119/1707-8年に、ハーンの称号とオルミーエの統治権をシャーから授けられた⁽³⁹⁾。以後19世紀末まで、オルミーエのアフシャール部の歴史はこの家系を中心に展開していくことになる。

さて、オルミーエのアフシャール部はめまぐるしい政治変動にいかに対応し、どのようにその地位を守ったのであろうか。年代順に整理してみよう。

①オスマン朝の侵攻

18世紀中、イランの内乱に乗じてオスマン朝は二度オルミーエを占領している。一度目の1138/1725年には、オスマン朝側の史料によれば、オルミーエ知事であった Moḥammad Qāsem Khān は戦わずしてオスマン朝に降伏し、知事職を安堵されたという⁽⁴⁰⁾。当時、アフガン政権とシャー・タフマースブ2世の戦いが続いていたとはいえ、Moḥammad Qāsem Khān はサファヴィー朝に正式に認められた知事であった⁽⁴¹⁾。にもかかわらず、課された国境防衛という任務を果たすことはなかったのである。

二度目の侵入は1731年のことであるが、オルミーエ知事 Parā Khān が敗北したこと⁽⁴²⁾以外には、情報がない。

②タフマースブ・ゴリー・ハーン/ナーデル・シャー期

1142/1730年、タフマースブ2世を擁したタフマースブ・ゴリー・ハーンの進軍に、オルミーエ地方のアフシャール部族の長(sarkarde)であった Bīstūn Khān は、オスマン朝との戦況を見極めたのち、4,5千の軍勢とともに、彼の傘下に加わった。このとき、オスマン朝の任命したオルミーエ知事であっ

表2 18世紀のオルムーミエ知事

年代	任命者	知事名	出自	備考	TAF以外の 典拠
1138/1725	オスマン朝	Yüsof Pāshā			
[オスマン朝	Farrokh Pāshā			
1143/1730	Tahmāsb Qolī Khān	Parū Khān	Afshār(Orūmiyye)		ANNのみ]
1147/1734	Tahmāsb Qolī Khān	‘Āshūr Khān	Afshār/Pāpālū (Khorāsān)		AAN Sami JN
[Tahmāsb Qolī Khān	Bektāsh Khān	Afshār/Querqlū (Khorāsān)	Dehqānのみ	
1148/1735-6	Tahmāsb Qolī Khān	Mohammad ‘Isā Khān	Afshār/Qāsem-lū(図2)	× Dehqān	Abraham AAのみ]
[Mohammad Qāsem Khān	Afshār		
1149/1736	Nāder Shāh	Mohammad Karīm	Afshār/Qāsem-lū(図2)	× Dehqān	AAN JN
[Nāder Shāh	Khān			
1158/1745-6		Faṭḥ ‘Alī Khān	Afshār/Arashlū		
1160/1747頃	Mahdī Khān Afshār	Mahdī Khān	Afshār/Qāsem-lū		
[Mahdī Khān Afshār	Faṭḥ ‘Alī Khān	Afshār/Arashlū		
		Naqī Khān	Afshār/Qāsem-lū	Dehqānのみ	
1164/1750頃		Āzād Khān	Afghān		Tajirebat
1172/1759	Karīm Khān Zand	Faṭḥ ‘Alī Khān	Afshār/Arashlū(再任)		Tajirebat GG GM
1176/1763	Karīm Khān Zand	Rostam Khān	Afshār/Qāsem-lū		MT GG GM
1182/1768-9	Karīm Khān Zand	Reẓā Qolī Khān	Afshār/Qāsem-lū(図2)		Tajirebat
1186/1772-3	‘Alī Morād Khān Zand	Emām Qolī Khān	Afshār/Qāsem-lū(図2)		Tajirebat
1197/1783		Amir Aşlān Khān	Afshār/Şayen – Qal’ē		Tajirebat
1198/1784		Mohammad Qolī Khān	Afshār/Qāsem-lū(図2)		Tajirebat GG TM RS

×は不記載 □の列はTAF以外の史料で補ったもの

Abraham: Abraham de Crète, “Mon histoire et celle de Nadir, Chah Des Perse”, tr. M.F.Brosset, *Collection d'historiens Arméniens*, Tom. 2, St.Petersburg. 1876. rep. Amsterdam. 1979.

Sami: Mustafa Sami ve Hüseyin Şakir ve Mehmed Subhi, *Tarih-i Sami ve Şakir ve Subhi*, İstanbul, 1198A.H.

キジルバシュのその後

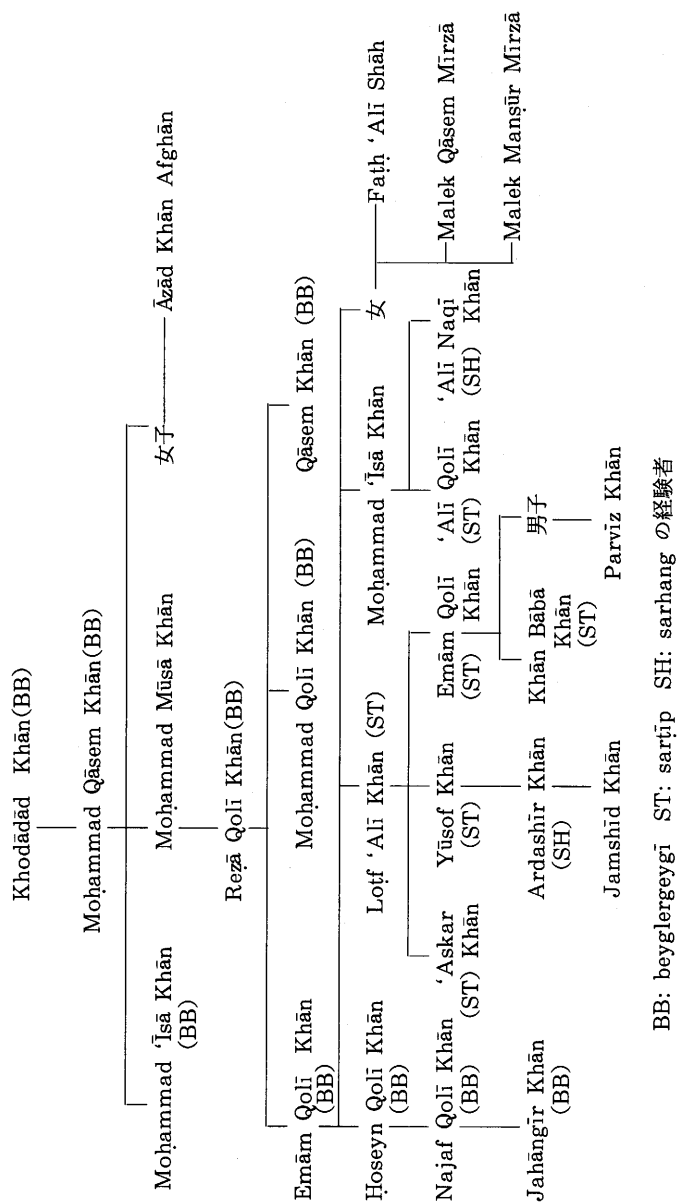


図2 Khodādād Khān Qāsem-lū の家系図

た Farrokh Pāshā の身柄を、タフマスブ・ゴリー・ハーンに引き渡した。この結果、タフマスブ・ゴリー・ハーンより Bīstūn Khān はアゼルバイジャン方面軍司令官に任命され、その子 Parā Khān は、オルミーエの知事に任命された⁽⁴³⁾。この情勢を機敏に利用したのである。

同名のアフシャール朝の成立は、オルミーエのアフシャール部にとってどのような意味を持ったのであろうか。アフシャール朝側の史料では、王家を生んだホラーサーンのアフシャール部とオルミーエのアフシャール部がかつては同一の部族であったと考えられている⁽⁴⁴⁾。また、史料 AAN によれば、タフマスブ・ゴリー・ハーンは Bīstūn Khān らオルミーエのアフシャール部に傘下に加わるよう呼びかける際に、同部族であることを強調している⁽⁴⁵⁾、TAF に至っては、同じアフシャール部であるがゆえにナーデル・シャーの事績を詳述している。少なくとも理念の上では、両者の間に親近感があったことは確かであろう。

そして、TAF はナーデル・シャーのもとでいかにアフシャール部が国家の要職を占めたかを強調しているが、そのなかには以下のようにオルミーエのアフシャール部出身者も含まれている。

Mahdī Khān Qāsemlū	Īrvān の守備防衛
Moḥammad Mūsā Khān Qāsemlū	‘Erāq, Kāshān 知事
Bahrām Khān Arashlū	Shīrvān 知事, Shīrāz 知事
Moḥammad Qolī Khān Arashlū	Sar Keshīkchī-bāshī (近衛長), Sabzevār 知事 ⁽⁴⁶⁾

また、ナーデルは部族の大規模な強制移住を行ったが、オルミーエのアフシャール部はナーデルの出身地ホラーサーン北部に移住させられたことも、同じアフシャール部として扱われていたことの反映であろう⁽⁴⁷⁾。

しかし、現実には、これらオルミーエのアフシャール部の有力者とナーデル・シャーとの関係は常に良好だったわけではなかった。たとえば先述の Bī-

stūn Khān は、ナーデル・シャーとタフマースブ2世の対立において、タフマースブ側に立ったとされ、ナーデルにより殺害された⁽⁴⁸⁾。また、Bahrām Khān やオルミーエ知事をつとめた Moḥammad Karīm Khān など、18人のアフシャール部のアミールはナーデルにより盲刑に処された⁽⁴⁹⁾。そして、近衛長であった Moḥammad Qolī Khān はナーデルの暗殺の首謀者の一人となり、暗殺の実行者のなかにもオルミーエのアフシャール部出身者が見られるのである⁽⁵⁰⁾。

これらのことから、理念の上での親近感とは裏腹に、現実においては、同じアフシャール部でもナーデル・シャーとオルミーエのアフシャール部の間には厳しい対立も存在した。ホラーサーンとオルミーエにそれぞれ移住して百年余りの間に、アフシャール部はそれぞれ別の道を歩み始めていたと言ってよいだろう。

③ナーデル・シャー以後

ナーデル・シャーの暗殺（1747年）後、イランは群雄割拠する戦乱期に突入した。オルミーエのアフシャール部も自立した大きな政治勢力として、諸勢力と覇権を争った。

まず、オルミーエのアフシャール部で初めて自立を果たしたのは Mahdī Khān と Naqī Khān の兄弟であった。彼らはナーデル・シャーに任命されたオルミーエ知事 Faṭḥ ‘Alī Khān Arashlū を実力で追放し、オルミーエの支配者となった。Mahdī Khān はアフシャール朝の内乱に乗じて権力を伸長し、Ebrāhīm Khān（後のシャー）より、タブリーズの総督 (beyglarbeygi) に任命され、オルミーエには弟 Naqī Khān を代理として置いた⁽⁵¹⁾。

Mahdī Khān がタブリーズ統治の失敗により住民に殺害されると、弟 Naqī Khān はオルミーエからタブリーズ遠征を行った。その際、彼に従ったのがクルディスタンにいたアーザード・ハーン・アフガンであった。Naqī Khān は、タブリーズ征服の後、その統治をアーザード・ハーンに委ねたが、両者の

関係は税の支払いをめぐる悪化し、二度にわたる戦争の結果、アーザード・ハーンが勝利をおさめ、Naqī Khānは捕虜となって盲刑に処された⁽⁵²⁾。

ザンド勢力、ガージャール勢力とイランの覇権をめぐる争ったアーザード・ハーンは元来スンナ派のアフガン族の出身であり、アゼルバイジャンの諸地方とはそれまで縁のなかった人物である。しかし、オルミーエのアフシャール部をはじめとするアゼルバイジャンの諸勢力の支持によって、初めて覇権争いに参加することが可能になった。オルミーエのアフシャール部では、アーザード・ハーンの代理としてオルミーエを委ねられた Moḥammad Mūsā Khān が、婚姻関係を結ぶことでアーザード・ハーンとの関係を強化した⁽⁵³⁾。また、かつてオルミーエ知事であった先述の Faṭḥ ‘Alī Khān は、アーザード・ハーンの片腕として活躍し、一時、アゼルバイジャン総督をつとめたほか、多くの戦闘にアフシャール部の軍を率いて参加した。したがって、Faṭḥ ‘Alī Khān や Shāhbāz Khān Donbolī らが、アーザード・ハーンがスンナ派であることを口実にモハンマド・ハサン・ハーン・ガージャールにつくと、アーザード・ハーン政権は崩壊を余儀なくされた⁽⁵⁴⁾。

ガージャール勢力の一時的な占領を経て、次に台頭したのは前述の Faṭḥ ‘Alī Khān であった。一時、ガージャール勢力に従ったが、ガージャール軍のシーラーズからの敗走の際に袂を分かち、アゼルバイジャンに帰還した。当時、政治的安定を求めているタブリーズ住民の要請により、タブリーズの支配者となった彼は、次第に勢力を拡大し、アゼルバイジャンを平定し、さらにアラス川以北のカラ・バグ地方にも遠征を行った⁽⁵⁵⁾。

④ザンド朝期とその後

1176/1763年、キャリーム・ハーン・ザンドの7ヶ月に及ぶオルミーエ包囲ののち、Faṭḥ ‘Alī Khānは降伏した(翌年処刑)⁽⁵⁶⁾。しかし、オルミーエの知事職は依然アフシャール部の手に残った(表2)。このうち、Khodādād Khānの家系に属する二人の知事就任は、アフシャール部の有力者が首都シー

ラーズへ赴いて、キャリーム・ハーンに請願することで実現したものであった⁽⁵⁷⁾。キャリーム・ハーンが1779年に没すると、知事 Emām Qolī Khān は来寇するクルド系諸族や Javānshir 勢力を撃退し、アゼルバイジャン全土に権力を伸長した。すなわち、TAF によれば、Marāghe, Khoy, Sanandaj, Sāvjbolāq (現 Mahābād), の各勢力は、彼に対して税 (kharāj-e dīvānī) を支払い、また、タブリーズの Najaf Qolī Khān Donbolī も軍費として現金 5000 tomān と 5000 kharvār の穀物を献上したという⁽⁵⁸⁾。1197/1783年にザンド朝のアリー・モラード・ハーンの討伐軍に敗れ戦死するまで、事実上の独立を保ったのである。

さて、ザンド朝に派遣され、Emām Qolī Khān を敗った次の知事 Amīr Arṣlān Khān は、わずか数カ月でアフシャール部の蜂起により追放され、アフシャール部の有力者の協議の結果、Khoy の支配者 Aḥmad Khān Donbolī の同意のもとに、Moḥammad Qolī Khān が知事となった⁽⁵⁹⁾。中央権力の空白により、周辺との諸勢力との戦争に明け暮れ、タブリーズへ来寇した Shaqāqī 族やオルミーエ付近を略奪したやクルド系の諸族と戦った。婚姻関係を結んだホイの Aḥmad Khān Donbolī が暗殺されると、軍を派遣して後継者を擁立した。また、献上金を求めて、Khoy や Marāghe を攻撃した⁽⁶⁰⁾。

以上のように、戦乱と錯綜した政治状況において、アフシャール部はオルミーエの知事職を確保すると同時に、しばしばアゼルバイジャン全土に勢力を拡大していたことが明らかとなった。オルミーエは、オスマン朝、ナーデル・シャー、アーザード・ハーン、キャリーム・ハーン等の占領を受けたが、その結果知事の解任は起こっても、アフシャール部から知事職を奪うことはできなかった。これらの強力な諸勢力もアフシャール部の実力を無視できず、彼らに知事職を与えることで彼らとの協力関係を維持したのである。

オルミーエのアフシャール部のさまざまな戦乱への対応に、あえて一つの原則を求めるなら、それは、支配者自身のあるいは部族の利益を最優先すると

いうものである。すなわち、アフシャール部は、オルミーエを根拠地としてそれ自体が一個の政治単位であるような地方勢力に成長したのである。自己の利益の保持のため、あらゆる政治的手段を用いるのは、この時代のさまざまな地方勢力と共通している⁽⁶¹⁾。すなわち、オスマン朝にも、スンナ派のアフガン族にも服属・協力し、あるいは同じアフシャール部であるナーデル・シャーに一方で協力、一方で暗殺に関与という行動をとり、近隣の諸勢力とも同盟・敵対関係を幾度も組み替えた。ここにかつてサファヴィー朝を支えて献身的に戦ったキジルバシュの姿を見ることはできない。

3. ガージャール朝の成立

18世紀までに独立性の高いオルミーエの一地方勢力に成長していたアフシャール部にとってガージャール朝の成立は、特別な意味を持った。しばしば弱体であるとか、地方分権的であるとか評されるガージャール朝であるが、史料の精粗の問題はあるが、TAF等による限り、オルミーエへの介入という点ではこれまでの諸王朝のうちで最も組織的かつ長期的なものであったようにさえ見える。しかも、その背後には近代という新たな時代が控えていたのである。

表3のように、アフシャール部の Khodādād Khān の家系は 1239/1823-4 年まで、オルミーエの知事職を保持し続けた。このうち、Moḥammad Qolī Khān はアーガー・モハンマド・シャーの暗殺に乗じて反乱を起こすなど、しばしばガージャール朝に反抗的な姿勢を見せた⁽⁶²⁾。しかし、他の知事はむしろ王朝に積極的な協力を示すことで、その地位を保った。

この場合の協力とは端的に献上金や税、兵力の提供という形をとった。そもそも、アフシャール部族が知事職を安堵される際に献上金が支払われた。たとえば、アーガー・モハンマドが Qāsem Khān を知事に任命するにあたっては、彼自身の名で献上を行ったことが決め手となり、Moḥammad Qolī Khān の

表3 ガーજヤール朝時代・19世紀のオルミーエ知事

年代	任命者	知事名	出自	TAF以外の典拠
1205/1790-1	Āghā Moḥammad	Qāsem Khān	Afshār/Qāsem lū(図2)	GG
1207/1792-3	Āghā Moḥammad	Moḥammad Qolī Khān	Afshār/Qāsem lū(図2/再任)	RS NT
1212/1798	Faṭḥ ‘Alī Shāh	Hoseyn Qolī Khān	Afshār/Qāsem lū(図2)	RS NT
1236/1820-1	‘Abbās Mirzā	Najaf Qolī Khān	Afshār/Qāsem lū(図2)	<i>Monsha’at</i> ET
1239/1823-4	‘Abbās Mirzā	Malek Qāsem Mirza	Qājār 皇族(図2)	TN
1244/1828	‘Abbās Mirzā	Ebrāhīm Khān Sardār	Qājār	TN
1248/1832	‘Abbās Mirzā	Jahāngīr Mirza	Qājār 皇族	NT
[1250/1834	Moḥammad Shāh	Heydar ‘Alī Khān	Shīrāzī	Modarresi
1250/1834-5	Moḥammad Shāh	Najaf Qolī Khān	Afshār/Qāsem lū(図2/再任)	ET
1255/1839-40	Moḥammad Shāh	Malek Qāsem Mirza	Qājār 皇族(図2/再任)	
1260/1844	Moḥammad Shāh	Yahyā Khān	Chehriqi(Kord)	
1264/1847-8	Moḥammad Shāh	Moḥammad Rahīm Mirza	Qājār 皇族	RS NT MB MN
1267/1851	Nāṣer al-Dīn Shāh	Moṣṭafā Qolī Mirza	Qājār 皇族	MB MN
1268/1852	Nāṣer al-Dīn Shāh	Jān Moḥammad Khān	Qājār	MB MN
1269/1853	Nāṣer al-Dīn Shāh	Moḥammad Sharīf Khān	Qājār	
[1271/1855	Nāṣer al-Dīn Shāh	Soltān Aḥmad Mirza	Qājār 皇族	
1272/1855-6	Nāṣer al-Dīn Shāh	Akbar Mirza	Qājār 皇族	Modarresi
1278/1861	Nāṣer al-Dīn Shāh	Nāṣer-ollāh Mirza	Qājār 皇族	Modarresi
1278/1861	Nāṣer al-Dīn Shāh	Asad-ollāh Khān	Qājār	Modarresi
1279/1863	Nāṣer al-Dīn Shāh	Malek Manšūr Mirza	Qājār 皇族(図2)	MB MN
1283/1866	Nāṣer al-Dīn Shāh	Soltān Aḥmad Mirza	Qājār 皇族(再任)	MB MN
1285/1869	Nāṣer al-Dīn Shāh	Yusuf Khān	Afshār/Qāsem lū(図2)	MB MN
[1296/1879	Nāṣer al-Dīn Shāh	Soltān Aḥmad Mirza	Qājār 皇族(再任)	MB MN]
[1297/1879-80	Nāṣer al-Dīn Shāh	Emām Qolī Khān	Afshār/Qāsem lū(図2)	Dehqān]

ET: ‘Alī Qolī Mirza E’tēzād al-Saʿāne, *Eksīr al-Tavārīkh*, be-ehtemām-e Jamshīd Kiyān-far, Tehrān, 1370Kh.

□内の情報は、TAF以外の史料で補ったもの。

再任には 4000 tomān, Hōseyn Qolī Khān の任命の際には 8000 tomān がガー
ジャール朝君主に支払われている⁽⁶³⁾。

税の徴収においても組織化が進んだ。TAF の断片的な記述によれば、税の
査定・徴収はおおよそ以下ようになっていた。まず、課税査定 (jam‘-bandī)
がタブリーズから派遣された官僚によって行われる。この査定額に基づいて徴
税されるのだが、その責任者は知事の場合と ‘Āmel とよばれる収税官の場合
があり、通常年間 3 回に分けて行われた。この徴税責任者に対してタブリーズ
から官僚が派遣され、会計監査 (moḥāsebe) が行われた⁽⁶⁴⁾。

このような税が地方にとって大きな負担となった場合、オルミーエ住民は
しばしば抵抗を試みた。その主体となったのは都市の名士とともにアフシャール
部の有力者であった。1222/1807-8 年、アフシャール部の名士とオルミー
エの有力者は税負担の軽減を知事 Hōseyn Qolī Khān に陳情し、その結果新
たにタブリーズから査定官が派遣された。しかし、それでも税負担は変わらな
かったので、今度は知事の同意のもと、アゼルバイジャン総督アッバース・ミ
ールザーに直訴し、その結果、税額の引き下げに成功した⁽⁶⁵⁾。また、1232/1817
年には、住民が過酷な収税を行う ‘Āmel の解任を求めて、タブリーズのア
ッバース・ミールザーに直訴したが、後任者も強引な戸数調査・検地を行ったと
ころから、今度は知事 Hōseyn Qolī Khān がファトフ・アリー・シャーに直
接陳情して、この官僚を解任することができた⁽⁶⁶⁾。国家の影響力がこの税問
題において次第が強くなっていくこと、また、アフシャール部出身の知事が国
家と地方住民との仲介者の役割を果たしていたことが確認できる。

さて、表 3 のように 1239/1823-4 年以降アフシャール部出身以外の知事が
増加し、大半を占めた。アフシャール部のオルミーエ移住以降、初めて起こっ
た現象である。ここに中央との関係は、派遣されてきた知事とアフシャール部
の関係に集約されることになる。

1239/1823-4 年にタブリーズから派遣された Malek Qāsem Mīrzā に関し

ては、アッバース・ミールザーによる任命状が残されている。これは、アフシャール部諸族はガージャール朝のために献身的な働きを示してきたがゆえに、高貴なる皇子を派遣するという論理にたち、この皇子とアフシャール部が真珠と真珠貝の関係、すなわち、この皇子の母がアフシャール部出身であることを強調する。最後のよびかけも、Beyglerbeygī, 学者やウラマーと並んで、アフシャール部族の主だった者・貴顕に対して、皇子を自らの権力者と認めるように記されており、アフシャール部への十分な配慮が窺える⁽⁶⁷⁾。TAFによれば、Malek Qāsem Mīrzāは名目的に統治するだけで、実際にはBeyglerbeygīのNajaf Qolī Khānが政務を執ったという⁽⁶⁸⁾。このようにアフシャール部が地方政治の実権を握っていたと考えられるのは、Jahāngīr Mīrzā時代(Najaf Qolī Khānが毎日nā'ebとして謁見場に座る)、Malek Qāsem Mīrzā(再任)時代(Najaf Qolī Khānがnā'eb)、Akbar Mīrzā時代(アフシャール部のものが要職を占める)、Malek Maṣṣūr Mīrzā時代(Jahāngīr Khānがnā'eb)であった⁽⁶⁹⁾。

これに対して、知事決定にあたって中央の事情が優先される場合もあった。たとえば、アッバース・ミールザーが1244/1828年ヤズド・ケルマーン遠征の出発前、軍資金の不足から知事職につくための献上金の額をさだめ、Ebrāhīm Khān Sardārが10,000 tomānを支払ってオルミーエ知事に就任した⁽⁷⁰⁾。このように中央に一方的に押しつけられた知事はしばしばアフシャール部やオルミーエ住民と対立した。Ebrāhīm Khān Sardārの厳しい徴税に対して、オルミーエ住民はウラマーを先頭にタブリーズに陳情に赴き、税額を引き下げること成功した。さらにオルミーエ周辺のクルド系諸族の反乱により、Ebrāhīm Khānは解任されることになるが、この反乱を教唆したのもアフシャール部のハーン達であったという⁽⁷¹⁾。このように、アフシャール部との対立が原因で解任された知事として、Malek Qāsem Mīrzā(再任時)(アフシャール部の長達がタブリーズで陳情・バスト)、Moḥammad Sharīf Khān(Yūsuf Khān

がタブリーズで陳情), Solṭān Aḥmad Mīrzā (アフシャール部とウラマーの扇動によりルーティーが反乱) が挙げられる⁽⁷²⁾。このように対立関係にあった知事に対してはあらゆる手段で抵抗し、解任に追い込むこともあったのである。

ここで、一つの疑問がわいてくる。オルミーエの知事職はサファヴィー朝以来保持し続けた権力の要であり、それを失ったことはアフシャール部にとって大きな打撃であったはずである。にもかかわらず、依然として地方政治に関与し、いっこうに勢力の衰えた形跡がないのはいったいなぜだろうか。

一つの理由は、オルミーエの知事職に代る出世の手段を得たことである。それは、新たに導入された西洋式軍隊の軍人となることであった。

イランにおける軍制の近代化は1807年、アゼルバイジャン総督アッバース・ミールザーがフランスのガルダン軍事使節団を受け入れたところから始まる。このとき、西洋式の軍事訓練を受けた新軍 (Nezām-e Jadīd) が新設された⁽⁷³⁾。オルミーエでは、歩兵の連隊として1222/1807-8年にアフシャール第7連隊 (Fowj-e Haftom-e Afshār), 翌年, 同第8連隊 (Fowj-e Hashtom-e Afshār), 1268/1851-2年にアフシャール新連隊 (Fowj-e Jadīd-e Afshār) が設立され、他に騎兵隊 (Savāre-ye Nezām) と砲兵隊 (Tūp-khāne) が設置された。いずれの連隊の設立の際にもアフシャール部の有力者が実際の編成にあたり、構成員もアフシャール部からなっていたと考えられる⁽⁷⁴⁾。近代的な軍の連隊にこうした部族名が当てられているのは一見奇異に思われるが、一時設立されたが短命に終わったオルミーエのもう一つの連隊が、アルメニア人や他のキリスト教徒からなっていたことを考えれば、当時のイランの社会状況を反映した方策だったのであろう。

この各連隊の連隊長にあたる sarhang には、最初に設立された第7連隊においては19世紀前半はアフシャール部の以外のものが就任したが、第8連隊、新連隊は設立当初からアフシャール部の有力者が就任した。また、アフシャー

ル連隊を統括する旅団長 (sartīp) が、第二次イラン・ロシア戦争以降置かれ、これにもアフシャール部の有力者が、具体的には Khodādād Khān の一族が就任した(図2)。そして、軍人となって少佐 (yāvar), 連隊長, 旅団長という経歴を経て、栄達するものも現れたのである。以下に3人の例を挙げよう。

① ‘Askar Khān ‘Abd al-Malekī (Īmānlū) (d. 1249/1833)

Īmānlū 族の有力家系の出身であり(図3参照), 18世紀後半からオルミーエ知事のもとで amīr-e ākhor (厩舎長), īshīk-āqāsī (儀典長) などを務めた(後述)。アーガー・モハンマドにオルミーエのアフシャール部が服属すると同時に、2000名の騎兵隊を率いてガージャール軍に合流、アーガー・モハンマドに従って、ケルマーン遠征、グルジア遠征に参加した。ファトフ・アリー・シャー期にも、騎兵隊を率いて、二度にわたる対ロシア戦争、対オスマン朝戦争などに参加、軍功をたてた⁽⁷⁵⁾。TAFには「人生の2/3を戦場で過ごした」とあるが、一方で外交でも活躍し、1808-9年使節としてフランスに派遣され、ナポレオンと会見している⁽⁷⁶⁾。また、1816年にはロシア使節の接待を行っている。

‘Askar Khān はオルミーエのアフシャール部の権力保持に重要な役割を果たした。いち早くアーガー・モハンマドに服属し、Qāsem Khān の知事任命、Moḥammad Qolī Khān の再任、Hoseyn Qolī Khān の知事任命にあたっては、いずれの際にもガージャール朝宮廷との仲介役を果たした。一方、オルミーエでも Īmānlū 族の族長 (rīshsefid) として権勢を誇り、ルーティーを扇動して住民と対立したヴァズィールを追放したり、あるいは敵対したオルミーエ知事に不当逮捕された住民を実力で解放した。オルミーエ地方西部の統治権をシャーに与えられ、ここを根拠地とする一方、オルミーエのバーザールの改修・拡張等の公共工事を行った⁽⁷⁷⁾。

② ‘Alī Qolī Khān Qāsemī

オルミーエ知事を輩出した Khodādād Khān の家系の出身(図2参照)。

弟 ‘Alī Naqī Khān とともにアフシャール連隊に加わり、軍功を重ねて beyg-zāde, yāvar (少佐)、アフシャール第8連隊の連隊長という経歴を歩み、ファトフ・アリー・シャー期の末にはヘラート・ホラーサーン戦線で活躍、アフシャール部の二つの連隊を統轄する旅団長となった。モハンマド・シャー期にはファールスやケルマーンで治安維持や徴税の任を果たし、その後、タブリーズに赴いて皇太子ナーセロッ・ディーン・ミールザーに仕えた⁽⁷⁸⁾。

ナーセロッ・ディーン・シャーの即位後は、中央で出世を続け、1268/1851-2年には Mīr Panje (五千人長) の位に、1274/1857年にはイラン全軍の Ājūdān-bāshī に任命された。彼は将校としては全軍のナンバー2であるこの地位に10年以上とどまった⁽⁷⁹⁾。

‘Alī Qolī Khān 自身とオルミーエの関わりはアフシャール連隊を離れたのちはあまり見られず、TAFは彼について多くを語らない。しかし、少なくとも、彼の経歴に見られるように、新設のアフシャール連隊がアフシャール部の有力者にとって、地位上昇のための一つのチャンネルとして機能していたことは明らかである。

③ Yūsof Khān Qāsemlū (d. 1294/1877-8)

同じく、Khodādād Khān の家系の出身 (図2参照)。1268/1851-2年、前述のアフシャール新連隊の創設とともに、その連隊長 (sarhang) となる。ヘラート遠征にこの新連隊を率いて参加、1274/1857-8年旅団長だった兄 ‘Askar Khān の死去にともなってアフシャール部の三連隊を統轄する旅団長となる。その後、トルキヤマーン遠征やクルディスタン遠征で軍功を挙げ、Shojā‘ al-Dowle のラクブを授けられた⁽⁸⁰⁾。

Yūsof Khān は、常にオルミーエの政治に関与し続けた。知事 Moḥammad Sharīf Khān の解任を求めてタブリーズに陳情に赴き、知事 Akbar Mīrzā のもとでは、知事に代わって実際に統治にあたった。知事 Soltān Aḥmad Mīrzā 追放するためにオルミーエのウラマーに書簡を送った。そして、ついに

1285/1869年念願のホイ、サルマースとともにオルーミーエ知事職を手にするのである⁽⁸¹⁾。Yūsof Khānのもとで史料TAFがまとめられたことを考えても、オルーミーエ知事職を取り戻したことがアフシャール部の歴史において大きな意味を持ったことが理解できる。また、弟の Emām Qolī Khān Eqbāl al-Dowle も知事職を得たが、彼もまた、二人の兄同様アフシャール連隊の出身であった。

以上のことから、アフシャール部が軍の近代化という機会を巧みに捉えて、その地位保全に利用し、ついには一度失ったオルーミーエの知事職を取り戻すにまで至ったことが、明らかになった。その後もアフシャール部は、少なくとも第一次世界大戦まで軍人を輩出し続けた⁽⁸²⁾。考えてみれば、アフシャール部出身の将校・兵が参加し軍功を挙げた大きな戦争は、いずれも西欧やロシアといった列強がイランを従属化させていく、まさに近代という時代がもたらした戦争であった。オルーミーエのアフシャール部はこうした戦争ですら、自らの地位保全・上昇に利用したのである。

3. 部族の性格と地方社会

1. 人口と住民構成

アフシャール部の移住以前、オルーミーエ地方の住民の多くはクルド系であったと考えられる。TAFによれば、アフシャール部の移住以前、クルド系の Amīr Beyg Barādūst 一党を服従させるためにサファヴィー朝は二度にわたる「Domdom 城の戦」を行わなければならなかった⁽⁸³⁾。また、別の史料も、オルーミーエを「クルド系諸族の故地 (maḥal-e tavaṭṭon-e Akrād)」と紹介している⁽⁸⁴⁾。それでは、人口の上で、移住したアフシャール部はオルーミーエ地方でどのような割合を占めていたのであろうか。

表4はさまざまな史料に見えるオルーミーエ市、オルーミーエ地方、アフシャー

ル部の人口をまとめたものである。もちろん、正確な統計のない時代のことであるから数字をそのまま信じることはできず、時代による変化を読みとることも不可能だが、おおよその人口比はつかむことができる。すなわち、オルミーエ市の人口とアフシャール部の人口がほぼ匹敵する規模にあること、しかしオ

表4 オルミーエとアフシャール部の人口

	オルミーエ市	オルミーエ地方	アフシャール部
TAF			8,000家族
<i>Seyahatname</i> (1655)	6,000戸	3,100,000人(150村)	
Akhvāl(19c初頭)	6,000戸		
Kinner(1813)	12,000人		
Dupré(1819)			
<i>Bostān</i> (1832)	5,000戸		25,000人
Wagner(1856)	30,000人		
Sheil(1856)			7,000戸
Abbott(1864)	30,000人	536村	
Curzon(1892)	30,000~40,000人	400,300人(200村)	

Akhvāl: 'Abd al-Razzāq Eṣfahānī, "Akhvāl-e Oshnaviyye va Orūmiyye", hrsg. von M.Bittner, *Sitzungsbericht der phil.- his. Classe*, 133-3(1896), S.7-49.

Kinner: J.M. Kinner, *A Geographical Memoir of the Persian Empire*, London, 1813, rep. New York, 1973

Bostān: Zeyn al-'Ābedīn Shīrvānī, *Bostān al-sayyāh*, (Tehrān), bī-tārīkh.

表5 19世紀初頭のアゼルバイジャンの部族人口と都市人口

部 族 (Dupré)		都 市 (Kinner)	
オルミーエのアフシャール部	25,000	Orūmiyye	12,000
Moqaddam 族	5,000	Marāghe	15,000
Donbolī 族	12,000	Khoy	25,000
		Tabrīz	30,000
Shaqāqī 族	25,000(-)	Salmās	20,000
Javānshīr 族	6,000~8,000		
Shāhsevān 族	8,000		
Mokrī 族	12,000~15,000		

ルーミーエ地方全体から見れば多く見積もっても1/10以下であろうことである。地方の中心都市の人口に匹敵するアフシャール部の人口は、彼らの権力維持に大きな役割を果たしたと考えられる。また、アフシャール部以外の住民はやはり主にクルド系であったと考えられ、TAFにしばしば登場することを考慮すればアフシャール部にとって彼らとの関係がとりわけ重要であったことは疑いない。

都市オルーミーエ自体の人口構成となると、諸史料の記述はさまざまで確定することはますます難しい。19世紀初頭のある史料はアフシャール部は「オルーミーエの町を占拠し続けている」⁽⁸⁵⁾とし、Curzonも人口の大半がアフシャール部族であるとしている⁽⁸⁶⁾。これに対して、WagnerやJaksonは大多数がペルシア人(Persians)としているのである⁽⁸⁷⁾。この史料間の齟齬は、後述するアフシャール部自体の変化によるものと考えられる。

さて、19世紀初頭のアフシャール部とオルーミーエ市の人口をアゼルバイジャンの他の部族・都市人口と比較したのが表5である。いずれも推計に過ぎないが、少なくともオルーミーエのアフシャール部は人口のうえでアゼルバイジャンの諸部族のなかで最大級のものであったことが明らかになる。部族人口は兵力と相関関係があると考えられるから、18世紀にアゼルバイジャンの他の諸勢力と互して覇権を争うことができたのも当然といえよう。また、部族と都市の人口比を見ると、これはマラーゲを支配したMoqqadam族、ホイおよびタブリーズを支配したDonboli族がそれぞれ支配した都市の人口の1/3, 1/4程度にすぎないことがわかる。人口の多さに支えられ、アフシャール部は常に地方社会に対する影響力を行使することができたのであろう。

2. 部族構造とその変化

史料TAFのなかで部族を示す用語は一定であり、アフシャール勢力全体を示す場合はil, その下位集団を示す場合はṭā'efeと言う語が用いられ、本稿

ではこれを便宜上、それぞれ「部」と「族」と翻訳している。

アフシャール部がオルミーエに移住した際、TAFによれば、Gondozlū, Kohkelū, Qerqlū, Qāsemlū, Arashlū, Īmānlūという族によって構成されていた。このうち同時代史料でサファヴィー朝期からアフシャール部の族として存在が確認できるのは、Gondozlū, Arashlū, Īmānlūの3つだけである⁽⁸⁸⁾。

TAFによれば、移住後アフシャール部は族単位でオルミーエ地方の各地に入植したという。確かにNikitineが示すように今世紀初頭にはアフシャール部は族単位でオルミーエ地方内で分布していた。また、族は政治的行動の単位でもあった。たとえば、18世紀半ばにMahdī KhānがArashlū族のFaṭḥ ‘Alī Khānを処刑しようとした際にはArashlū族全体の反乱につながると父から忠告を受け、思いとどまった⁽⁸⁹⁾。また、1248/1832-3年、オルミーエのキャラクタータルが知事に不当に逮捕された際には、‘Askar Khān ĪmānlūがĪmānlū族の若衆を率いて救出に成功した⁽⁹⁰⁾。それぞれの族にはrīshsefidと呼ばれる1, 2名の族長がいた。また、rīshsefidとの関係は不明であるが、族にはvākīlと呼ばれるものが任命されていた。これは、ガージャール朝初期の3点の校訂された文書のなかに現れ、たとえば1206/1791年にはアーガー・モハンマド・ハーンの勅令により、‘Abbās Beygなる人物がArashlū族のvākīl職を与えられ、30 tomānの現金と30 kharvārの穀物を年給としてオルミーエの税収のなかに定められた⁽⁹¹⁾。

また、族は軍事行動の単位でもあった。TAFはMoḥammad Qolī Khān時代の軍指揮官(ro’asā-ye lashkar) 14名の名を挙げたのち、それぞれが「自らの部族の長(ra’īs-e īl va tā’efe-ye khod)である」と述べている⁽⁹²⁾。また、Emām Qolī Khānの戦争の陣容16名の記述では、それぞれの指揮官が自らの手勢を率いているが、族長であることが明記されているのが3名、自族を率いていることが明記されているのが3名いる⁽⁹³⁾。こうした族単位の軍編成は、先述のアップバス・ミールザーによる軍制改革まで行われた。

さて、この18世紀のEmām Qolī Khān時代とMoḥammad Qolī Khān時代の合計30名の軍指揮官のリストを見ていくと、先に挙げたサファヴィー朝期の6族以外の族名を持つ者が、アフシャール部の支配者に従って戦争に参加したことがわかる。これを整理すると以下ようになる。

- ① 通常、別部族として有名なもの Khalaj, Ostājālū
- ② 出自不明のもの Qārā Ḥasanlū, Qūzbūnd, Yūghānlū, ‘Arablū, Qaṭlū
- ③ 「辺境の諸部族 (‘ashāyer-e sarḥadāt)」とTAFで呼ばれるもの Mokrī, Balbās, Shakāk, Zarzā

さて、興味深いのはこのうち①・②の出身者もTAFはアフシャール部の構成員に含めている点である。特に、かつてアフシャール部と並んでキジルバシュを構成したOstājālū部、あるいはその言語がトルコ語Khalaj方言として研究されているKhalaj族が、アフシャール部に数えられているのは一見奇異に思える。Khalaj族の場合、TAFの18世紀初頭の事件の記述ではアフシャール部とは別に扱われているが、アフシャール部と婚姻関係を重ねたことから次第にアフシャール部に統合されていったと推察される⁽⁹⁴⁾。他のものについては、どの時点で統合されたか、あるいは既存の族から分岐していったのかは不明であるが、いずれにせよ部族構成に変化が生じたことは確かである。

一方、③はいずれもオルーミーエ周辺に分布するクルド系の部族であり、TAFではアフシャール部と画然と区別されている。サファヴィー朝期からしばしば反乱を起こし、アフシャール部出身のオルーミーエ知事の軍事遠征の対象となっている。しかし、18世紀末になるとアフシャール部に従って戦争に参加したのみならず、オルーミーエの地方政庁にも勢力を伸ばしてくる。その例がMoḥammad Qolī Khānの側近であったZarzā族のAfrāsiyāb Solṭānであり、彼はvakīlであったMīrzā Abū al-Ḥasanとその支持者でSāvojbolāqの知事でMokrī族のBūdāq Khānと激しい権力抗争を行ったのである⁽⁹⁵⁾。これらのことから、オルーミーエのアフシャール部が次第に地縁によって周辺の

諸族を政権に取り込んでいった考えられるのである。

そして、このようなアフシャール部と周辺諸族の結びつきは、19世紀になっても失われることはなかった。自らオルーミーエ知事を務めた Jahāngīr Mīrzā は以下のように述べている。

アフシャールのハーン達はそれぞれクルド地域のある（特定の）地域やこれらの地域の長たち（rīshsefidān）を味方につけており、自らを彼らのオルーミーエのディーヴァーンにおける代理人としていて、このため、オルーミーエの知事はクルド地域にもアフシャールのくに（velāyat）にも介入することができなかった。すなわち、知事がアフシャールのハーン達の意見に反したことを言ったり、ディーヴァーンの税を請求したりすると、アフシャールのハーン達はクルド地域に反乱を起こさせ、性悪のクルド達が町や村を襲撃し、道路を遮断するように扇動するのである⁽⁹⁶⁾。

クルド系諸族との連携によって、ガージャール朝国家に対抗するアフシャール部の姿を見て取ることができよう。

シャー・アッパースによるアフシャール部の移住の一つの目的は反抗的なクルド系諸族への対策であった。たしかに、TAFを通読すると時代を問わずアフシャール部がクルド系諸族の反乱を鎮圧する記述が頻出する。しかし、ここに示したように、18世紀までにはアフシャール部は従来の部族の枠を越えて、いわば地縁に基づいて周辺部族を取り込みつつ勢力を拡大していったのである。

3. 都市オルーミーエとの関係

アフシャール部は周辺部族に勢力を伸ばしただけでなく、都市オルーミーエとの絆も強めていった。

サファヴィー朝期の都市オルーミーエに関する史料として、エヴリヤ・チェレビー（Evliya Çelebi）の旅行記が挙げられる。1065/1655年、Ganj ‘Alī Khān の知事任中にオルーミーエを訪れたという⁽⁹⁷⁾ 彼の詳細なオルーミー

エの描写のなかに、当時のアフシャール部と都市オルミーエの関係を読みとることができる。

TAFによれば、Kalb ‘Alī Khānはオルミーエの知事に就任すると、Tūprāq qal‘eと呼ばれる城塞に居を定め、政務を執ったという。この城塞は、都市オルミーエの北、1/4ファルサング（約1.6キロメートル）の地点にあった⁽⁹⁸⁾。エヴリヤ・チェレビーによれば、イル・ハン朝のガーザーン・ハーンによって建設されたこの城塞は周囲1万1000歩で、立派な城壁と堀を備える堅固なものであった。兵士4000人が駐屯し、大砲も310門据え付けられていたが、城内には、倉庫や兵営のほかモスクが一つあるだけで、隊商宿や公共浴場はなかった。また、城壁には西側に鉄製の門が一つあるだけで、城壁の外には全く建物がなかった⁽⁹⁹⁾。この記述から、Tūprāq qal‘eは都市的な機能を持たず、戦争に備える純然たる軍事施設であったと考えられ、アフシャール部出身の知事の第一の任務が軍事面にあったことを裏付けている。

移住当初の城塞と離れた都市オルミーエに対するアフシャール部の関与に関しては情報が乏しい。TAFによればKalb ‘Alī Khānは市壁の修復と水路の建設を行ったとされており、これがサファヴィー朝期に関して記されている唯一の公共事業である⁽¹⁰⁰⁾。また、アフシャール部の長たちは、自らの居住用に、市内のいくつかの街区（maḥalle）に立派な建物とバグを建設したという⁽¹⁰¹⁾。確かにエヴリヤ・チェレビーは、オルミーエ市内にバグや果樹園が多いこと、オルミーエのハーンの屋敷（saray）が市内にあることを記している⁽¹⁰²⁾。イランにおいて、バグを媒介にした遊牧民と都市の結びつきはすでに指摘されているところでもある⁽¹⁰³⁾。一方、エヴリヤ・チェレビーが挙げる集会モスクや公共浴場などの施設の名称には、パシャやシェイフ、キャラクター等々の名はついていてもハーンやアフシャール部に関係するものは見あたらない⁽¹⁰⁴⁾。アフシャール部の移住の性格上、都市機能への関与は限られたものとなったのであろうか。

これに対して18世紀になるとオルミーエ知事は市内で政務を執るようになった。アーザード・ハーンの政庁 (dār al-ḥokūme) は集会モスク付属のマドラサの東側にあり、また、ロスタム・ハーンが用いた謁見場 (dīvān-khā-ne-ye ḥokūmatī) は Bāzār-e bāsh 門付近にあり、バーザールやメイダーン (広場) という都市的な施設に隣接していた⁽¹⁰⁵⁾。このような知事が都市の内部で政務を執ったということは、知事自身の役割が国家のための辺境防衛からオルミーエ地方の支配にその重点を移したことを象徴しているように思われる。

また、18世紀はアフシャール部出身の知事によって、さまざまな建設事業が行われた時期でもあった。表6はアフシャール部による建設事業をまとめたものであるが、サファヴィー朝期にも見られたバグの建設のほか、タアズィエを上演するホセイニーエやマドラサ、モスク等宗教・教育施設の建設・修復やバーザールのような商業施設、建設・改修が行われている。史料の精度の問題があるものの、サファヴィー朝期やガージャール朝期に比して、その建設事業は盛んなように見える。オルミーエ地方の繁栄がアフシャール部出身の知事の利益と一致したことを示している。

このように建築からもアフシャール部出身の知事が次第に都市との関わりを深めていったように見えるのであるが、18世紀になるとアフシャール部の有力者自体も都市有力者との関係を増していった。TAFではオルミーエの有力者を述べる場合、「アフシャール部の長達とオルミーエの町の主だった者達 (ro'asā-ye Afshār va omanā-ye balade-ye Orūmiyye)」のような表現をしばしば用いる⁽¹⁰⁶⁾。場合によっては、「アフシャール部のアーヤーンとウラマーおよび、この地方の名士達 (a'yān va 'olamā-e Afshār va ma'āref-e ān diyār)」のような表現もある⁽¹⁰⁷⁾。「アフシャール部のウラマー」とは一見奇異に思われる。

ここでいう、アフシャール部の有力者とはいったいどのような者達であった

表6 18-19世紀アフシャール部有力者による建設事業

Mohammad Qāsem Khān (TAF 69)	• オルミーエ市壁の完成工事
Reẓā Qolī Khān (TAF 174)	• オルミーエの集会モスクの ḥoseynī-khāne • マドラサの周囲の住房と中庭 • 二つのミナレット [・オルミーエのバーザール内の大きなババーク] [・オルミーエ郊外の 'Emārat-e Chahār borj]
Emām Qolī Khān (TAF 181)	• Heydarlū 村の建物とババーク
Mohammad Qolī Khān (TAF 236)	• オルミーエの Yūrtshāh 門前の Bāgh-e Delgoshā • オルミーエ市壁の修理 • Bonāb-e Rowze 川の橋 • オルミーエの Arg 門前の Bāgh-e Nazar • オルミーエの Arg 門前の Bāgh-e Qeble • Dizaj-e Siya'ish 村の Bāgh-e Kamāl-ābād • Bārāndūz 村の Bāgh-e Horram-ābād • Bārāndūz 川の橋 • Dīvān-khāne-ye Sardar • オルミーエの Bazār-e Bazzāz-khāne • 橋, モスク, タキエ, 聖者廟の修復 • オルミーエの集会モスクの部屋の修理 • モスクのドーム屋根の金の装飾, 40 の灯火, ミンバル • オルミーエのバーザールの改修
Hoseyn Qolī Khān (TAF 302,378)	
Najaf Qolī Khān (TAF 493)	
'Askar Khān (TAF 462)	

[] は Dehqān で補ったもの

のだろうか。たとえば、TAFには18世紀のEmām Qolī Khān時代のアフシャー部の名士達(ma‘āref-e Afshār)の一覧があるが、挙げられている21名中、各族の族長(rīshsefid)が4名、なんらかの地方政庁の官職を持っているものが9名である⁽¹⁰⁸⁾。族長と並んで地方政庁の官職を持っていることが名士の条件の一つだったのである。

それでは、アフシャー部はどのような官職を保持していたのであろうか。18世紀中葉から19世紀初頭、すなわち、アフシャー部の独立性の最も強かった時代の官職保持者をまとめたのが表7である。ishīk-āqāsī(儀典長)やamīr-e ākhor(厩舎長)のような軍人系の職ばかりでなく、官僚系の職やウラマー系の職にまで進出していることがわかる。たとえば、Īmānlū族によって占められているvakīl職は別称vakīl-e māliyātと言い、一般にヴァズィールと呼ばれる財政上の責任者かつ知事の補佐役である。nāẓerは知事の家政を司る責任者であり、また多数の者の名が挙げられているmostowfī(財務官)職、およびその部下と思われるsarrashtedār職は、特別な専門技術が必要とされるものである。さらに、集団礼拝の導師たるemām-e jamā‘at、職名ははっきりしないがシャリーア法廷にかかわるウラマーも、複数現れているのである。TAFの「アフシャー部のウラマー」なる表現は言葉の綾などではなかったことになる。

これらの官職保持者の出身族を見ると、多少の偏りが見られる。たとえば、mostowfī職など財務官にはOstājalū族が圧倒的に多く、vakīl職はĪmānlū族で占められている。表にはしにくいがこれは、一族で官職を継承するためであり、mostowfī職のMīrzā Javād Ostājalūの子がMīrzā Kalb Ḥoseyn、およびlashkar-nevis(軍財務官)のMīrzā Moḥammad Ḥasanである。vakīl職、emām-e jamā‘at職の場合、より家系との関係がはっきりしており、次のようになっている。

表7 オルニーミーエの官職保持者

知 事	Faṭḥ 'Alī Khān(1158年)	Rostam Khān(1167年)	Emām Qolī Khān(1186年)
vakīl	Mirzā Ja'far Īmānlū	同 左	Mirzā Abū al-Ḥasan Īmānlū
nāzer	Mīrān Beyg Mahmūdīlū		'Alī Reżā Khān Qāsemīlū
lashkar-nevis			Mirzā Moḥammad Ḥasan Ostājālū
mostowfi	Mirzā Javad Ostājālū	同 左	Mirzā Kalb Ḥoseyn Ostājālū
同		Mirzā Kabīr Ostājālū	同 左
同		Mirzā Zāhir Ostājālū	同 左
同		Mirzā Babā Īmānlū	
ishik-āqasi		Mirzā Mostafā Sa'idlū	
amir-e ākhor			Sarmast Beyg Ahmadvand
divānbeygi			'Askar Āqā Īmānlū
sheykh al-eslām		* Sayyed Āqā Mīr Ḥasan	Ebrāhīm Khān Arashlū
emām-e jamā'at		Qāzi Mūsā al-Reżā Afshār	
知 事	Moḥammad Qolī Khān(1198年)	Ḥoseyn Qolī Khān(1212年)	Najaf Qolī Khān(1236年)
vakīl	Mirzā Abū al-Ḥasan Īmānlū	Mirzā Moḥammad Nabī Īmānlū	Mirzā 'Abd-ollāh Īmānlū
nāzer	[* Afrāsiyāb Solṭān Zarzā]	Mirzā Moḥammad Ḥasan Sa'idlū	Esmā'il Beyg Khalaj
mostowfi	Mirzā Mostafā Sa'idlū	同 左	* Hājji Mirzā Moḥammad Sharif
sarreshedār		Mirzā Rafi 'Ostājālū	
同 上		Mirzā Sāleḥ Ostājālū	
kalāntar	'Askar Khān Īmānlū	Khān Babā Beyg Qāsemīlū	
ishik-āqasi		同 左	* Mirzā Moḥammad Sa'id
qūr yasāvoli-bāshi	* Sayyed Mīr Vahid Āqā	同 左	Kalb Reżā Khān Qāsemīlū
sheykh al-eslām	Mirzā Moḥammad Ḥoseyn Afshār		* Soleyman Beyg Mokri
Emām-e jamā'at	* Akhond Mollā Šafar		
omūr-e shar'i	Mirzā Moḥammad Afshār		
同 上	Mirzā 'Alī Afshār		
同 上	Mirzā Aghūrlū Arashlū		
mollā-bashi			

出典：TAF 92, 159, 180, 222-223, 300-301, 380-381.

* はアフシヤール以外のもの

① vakīl 職

この職を占めていたのは、Īmānlū 族のうちで最有力であると考えられる Mīrzā Ja'far の家系であった（図 3）。Mīrzā Ja'far は、18 世紀半ばから約 30 年間 vakīl 職を務めると同時に、Īmānlū 族の族長（rīshsefid）であったという。もっとも、彼が軍事行動に部族を率いて参加した形跡はなく、全くの文官であったと考えられる。政治情勢のめまぐるしい変化により知事が交替しても彼の地位は変わらず、キャリーム・ハーン期には 3 度にわたってアフシャール部を代表して首都シーラーズに赴いて、知事人事に関する陳情を行うなどの活躍をした⁽¹⁰⁹⁾。彼のあと、図 3 に示されているように Mīrzā Abū al-Ḥasan, Mīrzā Moḥammad Nabī, Mīrzā 'Abd-ollāh と 19 世紀前半までこの職を継承した。また、Mīrzā Ḥoseyn は mostowfī から身を起こし、やはり、Malek Qāsem Mīrzā のもとの pīshkār と呼ばれる知事の補佐役になっている。

興味深いのは、一方でこの家系から多くの軍人が出ていることである。すでに紹介した 'Askar Khān は 18 世紀から部族兵を率いて、数多くの軍事行動に参加している。ガージャール朝下ではさらに軍人となるものが増え、歩兵連隊の連隊長（sarhang）や騎兵隊の隊長（sarkarde）となっている。

② emām-e jamā'at 職

この職を占めていたのは、Qāzī Āqā Reḡā の一族であった（図 4）。ニスバからアフシャール部の出身であることは明らかだが、族名は不明である。代々、カーディーでエマーム・ジョムエ（金曜礼拝の導師）であったというから⁽¹¹⁰⁾、歴史的に早い段階で族から離れた可能性もある。この職を保持していたと TAF で最初に確認できるのは、Qāzī Mūsā al-Reḡā である。時期が不明で表 7 に示すことはできなかったが、彼のあとやはりアフシャール部の Ākhond Mollā Bāqer Qāsemī がこの職を務め、この人物の死後（1194/1780 年）、再びこの家系の Moll Moḥammad Ḥoseyn がこの職を務めた⁽¹¹¹⁾。そのあとは息子の Āqā 'Alī Ashraf, Ḥājji Āqā Majīd が継承した。Āqā 'Alī Ashraf が

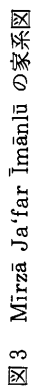


図3 Mīrzā Ja'far Īmānlū の家系図

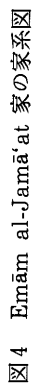


図4 Emām al-Jamā‘at 家の家系図

「法学者の避難所 (marja'-e faqīh) と呼ばれ、Hājji Āqā Majīd がシャリーア法廷が開かれる場所である mahkame をバーザール付近に持っていることから、時代的にカーディーとは呼ばれないものの、イスラーム法も司っていたと考えられる⁽¹¹²⁾。サイエドの家系によって占められた sheykh al-eslām と同様、知事が圧政をしいた場合には、住民の先頭に立って陳情に赴いた。

この家系に属する者のうち、Mollā Āqā Reḡā は職務内容は不詳だが vakīl al-ra'āyā (「臣民の代理人」) と呼ばれている。また、Mollā Mūsā al-Reḡā についてはその年金 (mostamarī) に関する 20 点あまりの文書が校訂・出版されており、息子 Mollā Naḡar 'Alī もウラマーで、学問を究めるためにイラクのシーア派の聖地に移り住み、父の年金を受け取っていたことがわかる⁽¹¹³⁾。これらのことから、この家系が純粋なウラマーの家系であることはほぼ間違いないであろう。

以上により、この特定の家系と官職が密接に関係を持ち、しかも、知事の交替や政治情勢の変化にかかわらず、官職を保持し続けたことが、明らかになった。そこで示される彼らの性格は、部族出身というイメージとは異なり、むしろ、前近代のイランで王朝の交替にもかかわらず官僚・ウラマーを輩出した都市の名家に近い側面をもあわせ持つ。表 7 で官職保持者の大多数がオルミーエのアフシャール部の出身であることは、史料の性格も多少は影響しているが、やはり、アフシャール部の有力者が都市に居住し、地方政庁でなにがしかの官職を得るような都市の名士層の一定部分を形成したことを示すように思われる。今世紀に入って地方史家 Kāviyānpūr が「オルミーエの古い家系のほとんどが有名なアフシャール部の出身である」⁽¹¹⁴⁾ と述べているのは、まさしくこの変化の結果を示しているのである。そして、都市の名士に変化していった有力者の存在は、アフシャール部のオルミーエ支配にも、大きな支えとなったと考えられるのである。

一方、有力者以外のアフシャール部の人々の姿が都市オルミーエで確認で

きるのは、史料的には19世紀前半に入ってからのことである。FraserとSheilという二人のイギリス人の旅行記に現れるのである。Fraserによれば、オルミーエの町の通りでは、しばしば槍を持ったクルド人と湾曲刀を持ったアフシャール部族が刃傷沙汰におよび、血生臭い場面が見られたという⁽¹¹⁵⁾。Shielはより詳細に以下のように述べる。

このトルコ人（アフシャール部族）たちは……喧嘩沙汰に専心しているように見える。彼らは喧嘩の際、わめき叫ばずにはいられない。町の全体、あるいは少なくとも町の彼らの側には、彼らののしり声や非常に下品な悪罵が響きわたっている。彼らが皆用意している非常に恐ろしい *kamma* (*qame*) と呼ばれる短剣は、いつも彼らの傍らにあって、言うが早いか切りつけようという状態である。……彼らのもう一つの慣習は白昼堂々とバーザールで物品強奪・泥棒することである。肉や野菜などの食品は彼らの手にかかる危険がある。しかし、とりわけ上等の羊皮の帽子には彼らは抗しがたい誘惑を感じ、通常、最初の一撃で持ち主を打ち倒して、欲望を満足させる⁽¹¹⁶⁾。

次にアフシャール部族ほど大酒を飲む人々を見たことがないという話が続く。偏見も感じられるが、まさにならず者が市中を闊歩しているというイメージである。

Shielがさらに、アフシャール部の兵士がバーザールで騒動を起こしたことを記しており、部族民が兵士として都市に入ってきたことを窺わせる⁽¹¹⁷⁾。しかし、これらの描写でまず連想されるのは、TAFのなかに登場するならず者、*ajāmer*, *owbāsh*, *alvāt*, *johhāl* と呼ばれる人々であろう⁽¹¹⁸⁾。これらの人々は、都市オルミーエにおいて、アーシューラーの日にヘイダリー・ネウマティー争乱を起こしたり、あるいは、アフシャール部の有力者やウラマーに扇動されて蜂起し、知事や財務官僚を追放する記事のなかに現れる。もちろん、すべてのこうしたならず者がアフシャール部の出身であったかどうかは明らかではな

い。しかし、少なくとも「アフシャール部の無知なものとならずもの (johhāl va alvāt-e Afshār)」という表現もあり⁽¹¹⁹⁾、先の Shiel の記述を考えあわせるとこの二つが重なりあうと見たほうが妥当であろう。ならず者と化して都市に入ってきたアフシャール部族民は、アフシャール部の有力者やウラマーにとって、ことあるときに用いることのできる暴力装置でもあったのである。

4. 農村部とアフシャール部

すでに述べたように、移住後アフシャール部は部族単位でオルミーエ地方全体に入植した。その分布は TAF によれば Kalb ‘Alī Khān によって以下のとおりに定められた⁽¹²⁰⁾。

Gondozlū 族	Maḥal-e Dūl
Kohkelū 族	Nāzlū 川下流
Qerqlū 族	Rowze 川沿い
Qāsemīlū 族・Arashlū 族・Īmānlū 族 地方全体に広がる	

この記述は、Nikitine の示す今世紀初めの分布とも概ね一致している(図5)。

さて、前述のように、オルミーエ地方にはそれ以前から主としてクルド系の住民がいたと考えられる。こうした住民とアフシャール部との住民の接触に関して興味深い数点の文書が *Barrasīhāye Tārīkhī* 誌に紹介されている⁽¹²¹⁾。マラーゲの近くの Ayyūb-e Anṣārī と呼ばれる聖者廟にまつわるサファヴィー朝期を中心とする文書9点で、聖者廟の管理職の任命文書(文書1, 3)、この廟のある Sārūqūrhān 地方⁽¹²²⁾ [nāhiye] の malek 職の任命文書(文書2)、この廟のワクフ財をめぐる紛争に関する文書(文書4～9)からなる。

このうち、この地方の諸事全般を委ねられた行政官と考えられる malek 職⁽¹²³⁾への任命にあたってオルミーエの知事の書付が必要なことが、文書2 (Shāh Soleyman の勅令・1103/1692年付)より明らかになる。すなわち、シャー・アッバース2世時代の勅令(parvānche)と「オルミーエ知事であった故

Ganj ‘Alī Beyg の書付 (neveshte) により」前任の Malek は任命されたのであり、新たな Malek の任命にあたっては、オルミーエの知事である Khānī Khān (?)⁽¹²⁴⁾ と臣民達の筆と印になる同意の文書 (maḥzar) が必要であった。これが単なる事務上の手続きではなかったことは、この malek がアフシャール部族と共同でワクフ侵略を行っていることから明らかであり、オルミーエ地方から距離的に離れたこの地方にもアフシャール部出身のオルミーエ知事の権力が及んでいたことが明らかとなる。

一方、ワクフ財をめぐる紛争に関する文書では、勅令に付されているワクフ管理人の請願書 (‘Arṣe-dāsht) に、アフシャール部族の行動が詳細に記されている。まず、文書 4 (1105/1694 年付) ではトユール保有者 (toyüldār) 達がワクフ財に損害を与えていることを訴えているが、このトユール保有者とはとりもなおさずアフシャール部族のことであった。文書 5 によれば、先述の Malek やアフシャール部族はワクフ地を襲撃し、4 人を負傷させ、農地を占拠するとともに羊や牝牛等の家畜や刀剣等の物品を奪い、文書 6 (1108/1697 年付)、文書 7 (1116/1705 年付) によれば、度重なる請願と勅令にもかかわらず、この Malek らはワクフであるいくつかの村落をその後も占拠しつづけ、穀物や家畜を略奪した。

これに対し、ワクフ管理人も法的手段で対抗しようとした。しかも、この件をアフシャール部出身のオルミーエ知事ではなく、Garrūs 知事や Ardalān 総督、Kermānshāh 知事に担当させるべく請願を繰り返したのである。彼らがこうした行動を取ったのは、おそらくはクルド系であった彼らに対して、やはりクルド系のこれらの知事・総督の方がアフシャール部のオルミーエ知事よりも好意的であったためであろう。しかし、シャールの勅令は、オルミーエ知事やアゼルバイジャン総督および総督代理宛に発せられ、紛争は一向に解決しなかった。1114 年にはトユール保有者によって、ワクフ管理人の部下が殴打されるという事件が起こり、これをワクフ管理人がオルミーエ知事に告訴し

たところ、逆に原告のワクフ管理人の方が逮捕され、拘禁・体刑を受けた。この結果、ワクフ管理人はワクフ地を離れ、Ardalānへ避難を余儀なくされた。トユール保有者達、すなわち、アフシャール部 Qerklū 族の者達は、この間にワクフ地から 100 家族を徴発し、水や牧草の豊富な土地を奪い、夏営地・冬営地の牧草を刈り取ってしまったという(文書 7)。

一連の文書が示すように、アフシャール部のワクフ地占拠に法的根拠は全くなかった。文書では、アフシャール部の者のことをトユール保有者と呼んでいるが、トユールの登録台帳には、問題となっているワクフの村落 5 村のうち、1 村を除いて、記録はなかった(文書 8・Shāh Soltān Hoseyn の勅令)。しかし、アフシャール部の知事の支配下にあったこの地方では、シャーの勅令をもってしても、アフシャール部族による違法行為を防ぐことはできなかったのである。以上の一連の経緯が示すように、多数のアフシャール部族の移住・入植は、必ずしも合法的ではない武力による略奪・占拠という形を取る場合もあったのであり、従来からの住民との摩擦・紛争を引き起こしたと考えられる。しかし、その際アフシャール部が決定的に有利だったのは、アフシャール部の知事が統治権を持っていたことである。法的に強く保護されているワクフ財ですら侵略されたのであるから、他の場合は推してしるべしであろう。

こうしてさまざまな手段を通じて、アフシャール部は着実に土地・財産を集積していった。その結果、19 世紀半ばには、Abbott の報告によれば、オルミーエに住むアフシャール部の有力者は大地主となっていた⁽¹²⁵⁾。TAF においても、アフシャール部の有力者の私有地について言及されている⁽¹²⁶⁾。

さて、土地所有とならぶ、もう一つの問題は、アフシャール部の定住化である。しばしば、トルコ系部族=遊牧民と考えがちであるが、実際に遊牧をしていたかどうかを史料上で判断することは困難である。TAF では移住・入植後、Gondozlū 族が「村と耕地・農地を開発し、土地の繁栄と水路の建設・樹木の育成に努めた」とされ、また、アフシャール部全体がオルミーエ地方の気候

の良さのゆえに農業・耕作に従事して、財産を築いたとされている⁽¹²⁷⁾。果たして移住直後からこのように農業に従事していたかどうかは疑問であるが、少なくとも TAF の著者は自らの祖先に農業従事者のイメージを持っていたことになる。

しかし、遅くとも 19 世紀半ばまでには、アフシャール部は定住化していたらしい。Shiel はイラン全土の部族を一覧表にしているが、アフシャール部はテント数ではなく戸数で 7,000 戸と数えられ、定住を示す Tāt という語も付されている⁽¹²⁸⁾。また、Wagner は、オルミーエ西部の山岳地帯の奥の山沿いに貧しい村が点在することを述べているが、これらの村の住人はアフシャール部出身であったという⁽¹²⁹⁾。今日この地方に部族集団としてアフシャール部が存在しないことを考えても、特に国家による定住化政策が行われていないにもかかわらず、19 世紀半ばまでには定住化が完了していたと考えてよいだろう。

おわりに

史料の限界により統一的な記述ができない部分もあったが、オルミーエのアフシャール部の 3 世紀にわたる歴史とその変容を明らかにすることができた。キジルバシュとして有名なアフシャール部がシャー・アッパースの中央集権政策によりオルミーエに移住し、国防衛にあたったこと、18 世紀にはオルミーエを根拠地とした地方勢力としてアゼルバイジャンを舞台とした権力闘争に参加し、覇権を争ったこと、ガージャール朝成立後は次第に強まる国家の介入に知事職を失い、軍の近代化を利用して権力の保持に努めたことを述べた。また、地縁によって周辺の諸部族を取り込んでいくとともに、有力者は都市に居住してさまざまな地方官職を得て都市の名士となり、都市に流入した部族民は無頼化し、農村においては有力者による土地集積と部族の定住化が進むという過程が存在したことを明らかにした。すなわち、アフシャール部はオルミー

エ地方社会との関係を強化する方向でその性格を変えたのである。

このようなアフシャール部の変容を見ると、これまでイラン史においてあまりに「部族」という概念を固定的に捉えすぎていたのではないかという反省が生まれる。「部族の再台頭」について言えば、こうした部族そのものの変容を無視して、再台頭か、全体としての衰退かを議論することはあまり建設的ではないのではないだろうか。本稿で明らかとなったオルミーエのアフシャール部の姿は、部族・非部族の区分を越えて地方勢力としての共通の要素を多分に持っているように思われるのである。

もちろん、オルミーエのアフシャール部は一つの事例にすぎないが、たとえば Marāghe の Moqaddam 族は、サファヴィー朝期から知事職を保持し、18 世紀には地方勢力として覇権を争い、近代に入っても地方エリートとしてその地位を保ったことが明らかになっている⁽¹³⁰⁾。また、Abbott によれば彼が訪れた当時のアゼルバイジャンでは、一年中遊牧生活を送っている部族はほとんどなく、大多数が定住民ないしは部分的に移動する住民であったという⁽¹³¹⁾。少なくともアゼルバイジャンではアフシャール部は特異な事例であると考えする必要はないであろう。また、イラン全土に関しても、シャー・アッパース以降、19 世紀に至るまで部族の地理的分布があまり変化していないという事実⁽¹³²⁾は、アフシャール部のように地方社会との関係を深めていった部族が他にも存在した可能性を示唆している。

もし、イランの多くの部族がアフシャール部のような変化を遂げたとすれば、遊牧民の影響を一つの特徴とするイラン史における 18 世紀・19 世紀の位置づけにもかかわってくる。今後は広く事例を集めるとともに、こうした変容が起こったメカニズムについてさらなる検討を行いたい。



図6 アフシャール部関係略地図

L. Lochart, *The Fall of the Safavid Dynasty and the Afghan Occupation of Persia*,
(Cambridge, 1958) 所収の地図を元に作成 — — — — オスマン・サファヴィー国境

史料略号

- AAN: Moḥammad Kaẓem Marvī. *‘Ālam-ārā-ye Nāderī. be-taṣḥīḥ-e Moḥammad Amīn Riyāḥī*, se jeld. Tehrān. 1369Kh.
- Alqāb: Mīrzā ‘Alī Naqī Naṣīrī. *Alqāb va movāḥib-e dowre-ye salāṭīn-e Ṣafaviyye. taṣḥīḥ-e Yūsof Raḥīmīlū*. Mashhad. 1371Kh.
- AN: Moḥammad Tāher Vahīd Qazvinī. *‘Abbās-nāme. be-taṣḥīḥ va takhasīyye-ye Ebrāhīm Dehqān*. Arāk. 1329Kh.

- GG: Mīrzā Moḥammad Ṣādeq Nāmī Eṣfahānī. *Tārīkh-e gītīgoshā*. bā moqaddeme-ye Sa'id Nafīsī. Tehrān. 1363Kh.
- GM: Abū al-Ḥasan Ghaffārī Kāshānī. *Golshan-e Morād*. be-ehtemām-e Gholmā Reżā Ṭabāṭabā'ī Majd. Tehrān. 1369Kh.
- JN: Mīrzā Mahdī Khān Astarābādī. *Jahāngoshā-ye Nāderī*. be-ehtemām-e 'Abd-ollāh Anvār. Tehrān. 1341Kh.
- KhT: Moḥammad Ma'sūm b. Khājegī Eṣfahānī. *Kholāṣat al-siyar*. Tehrān. 1368Kh.
- MB: Moḥammad Ḥoseyn Khān E'temād al-Saltāne. *Mer'āt al-boldān*. be-kūshesh-e 'Abd al-Ḥoseyn Navā'ī va Mīr Hāshem Moḥaddes. chahār jeld. Tehrān. 1367-68Kh.
- MN: Moḥammad Ḥoseyn Khān E'temād al-Saltāne. *Tārīkh-e montazem-e Nāserī*. be-taṣḥīḥ-e Moḥammad Esmā'il Reżvānī. se jeld. Tehrān. 1363-67Kh.
- Modarresī: Modarresī Ṭabāṭabā'ī. "Asnād va akhkāmī az khānedān-e Afshār-e Orūmī". *Barrasīhā-ye Tārīkhī*. 7-2 (1351Kh). ṣ.147-202.
- MS: 'Abd al-Razzāq Maftūn Donbolī: *Ma'aṣer-e solṭāniyye*. be-ehtemām-e Gholām Ḥoseyn Ṣadrī Afshār. Tehrān. 1351Kh.
- MT: Abū al-Ḥasan b. Moḥammad Amīn Golestāne. *Mojmal al-tavārikh*. be-sa'ī va ehtemām-e Modarres Razavī. Tehrān. 2536Sh.
- NT: Mīrzā Moḥammad Taqī Khān Lesān al-Molk Sepehr. *Nāsekh al-tavārikh: salātīn-e Qājāriyye*. be-taṣḥīḥ va ḥavāshī-ye Moḥammad Bāqer Behbūdī. Chahār jeld. Tehrān. 1353Kh.
- QKh: Valī Qolī b. Owd Qolī Shāmlū. *Qeṣaṣ al-khāqānī*. taṣḥīḥ va pāvarqī-ye Ḥasan Sādāt-e Nāserī. Tehrān. 1371Kh.
- RS: Reżā Qolī Khān Hedāyat. *Rowḩat al-ṣafā-ye Nāserī*. jeld-e nohom va dahom. Tehrān. 1339Kh.
- Seyahatname*: Evliya Çelebi. *Seyahatname*. celd.4. Istanbul. 1314 A.H.
- TA: Mollā Jalāl al-Dīn Monajjem Yazdī. *Tārīkh-e 'Abbāsī yā rūznāme-ye Mollā Jalāl*. be-kūshesh-e Seyf-ollāh Vahīd Niyā. Tehrān. 1366Kh.
- TAA: Eskandar Beyg Monshī. *Tārīkh-e 'ālam-ārā-ye 'Abbāsī*. do jeld. Tehrān. 1334Kh.
- TAF: Mīrzā Rashī Adīb al-Sho'arā. *Tārīkh-e Afshār*. be-kūshesh-e Maḥmūd

- Rāmiyān va Parvīz Shahriyār Afshār. (Rezāyye). 1346Kh.
- Tajrebat*: ‘Abd al-Razzāq Beyg Donbolī Maftūn. *Tajrebat al-aḥrār va tasliyat al-abrār*. do jeld. be-taṣṭih-e Ḥasan Qāzī Ṭabāṭabā’ī. Tabriz. 1349-50Kh.
- Tazkerat*: (Mīrzā Samī‘ā). *Tazkerat al-Molūk*. be-kūshesh-e Moḥammad Dabīr-e Siyāqī. Tehrān. 1368Kh.
- TM: Moḥammad Faṭḥ-ollah b. Moḥammad Taqī Sāravī. *Tārīkh-e Moḥammadī*. be-ehthemām-e Gholām-rezā Ṭabāṭabā’ī Majd. Tehrān. 1371Kh.
- TN: Jahāngir Mīrzā. *Tārīkh-e now*. be-sa’ī va ehtemām-e ‘Abbās Eqbāl. Tehrān. 1328Kh.
- ZTAA: Eskandar Beyg Torkamān. *Zeyl-e tārīkh-e ‘ālam-ārā-ye ‘Abbāsī*. be-taṣṭih-e Soheyli Khānsārī. Tehrān. 1317Kh.

- 1 A.K.S. Lambton, "Tribal resurgence and the decline of the bureaucracy in the eighteenth century" in T. Naff and R. Owen eds. *Studies in Eighteenth Century Islamic History*, Carbondale & Edwardsville, 1977. pp. 108-129, 377-382. はからずも、R.Tapperもこの言葉を用いている (R. Tapper, "The tribes in eighteenth- and nineteenth- century Iran" in P. Avery et al. eds. *the Cambridge History of Iran*, vol.7, Cambridge, 1991, p. 513)。
- 2 拙稿「ヤズドのモハンマド・タギー・ハーンとその一族——18-19世紀イランの地方有力者の実像」『史学雑誌』第102編1号(1993年)1-36頁；「ヤズドのハーン家の社会経済的背景——建設事業とワクフを中心として」『東洋学報』第76巻1・2号(1994年)053-083頁。
- 3 実際、Lambtonは、イランの社会構造はセルジューク朝／イル・ハン朝期より不変であると考えているようである (A.K.S. Lambton, *Continuity and Change in Medieval Persia*, Albany, 1988, p. 27)。
- 4 J. J. Reid, "The Qajar uymaq in the Safavid period", *Iranian Studies* 11 (1978) p. 137; G. R. Garthwaite, *Khan and Shahs: a documentary analysis of the Bakhtiari in Iran*, London, 1983. p. 55. また、M. Kunkeの研究はその表題及び主内容である表題及び校訂・翻訳した史料と離れて、サファヴィー朝的国家秩序の崩壊で締めくくられている (M. Kunke, *Nomadenstämme in Persien im 18. und 19. Jahrhundert*, Berlin, 1991, S. 155-162)。

- 5 Tapper, *op.cit.*, p. 506.
- 6 B. Nikitine, "Les Afšārs d'Urmīyeh", *Journal Asiatique*, 214 (1929) pp. 67-123; 'Alī Dehqān, *Sarzamīn-e Zardosht: owzā-e ṭabī, siyāsī, eqtešādī, ejtemā'ī, tārikhī-ye Reżā'īyye*, Tehrān, 1348Kh. 以下それぞれ, Nikitine, Dehqān と略。
- 7 出版地は明記されていないが, 「西アゼルバイジャン 2500 年国民祭中央会議 出版部 (Enteshārāt-e Showrā-ye Markazī-ye Jashn-e Mellī-ye 2500 Sāl-e Āzarbā'ījān-e Garbī)」による出版である。校訂の際して, オルミーエのアフシャール部に直接関係ない記述を省略しているなど, 問題がないわけではない。
- 8 TAF 5.
- 9 Dehqān, §.358.
- 10 第7連隊のオルミーエ帰郷に関するもので文面は以下の通り(下線部分が異なる)。do rūz ba'd az vorūd-e ū fowj-e haftom rā ke bā Ardashīr Khān Sarhang pesar-e Shojā al-Dowle qarāvol būdand az Tabriz rokhshat-e enşerāf be-velāyat-e Orūmī dādand valī Emām Qolī Khān Sartīp barāye anjām-e omūrāt-e 'omde-ye khod dar Tabriz tavaqqof namūdand (後略) (Dehqān, §.358)
- ba'd az chand rūz fowj-e haftom rā ke bā Ardashīr Khān Sarhang pesar-e Shojā' al-Dowle qarāvol-e makhshūş būdand az Tabriz morakhkhaş va ravāne-ye Orūmī dāshtand va khod Boyūk Khān Sartīp maḥẓ-e dastūr al-'amal dar Tabriz tavaqqof namūd. (TAF 512)
- 11 Nikitine, p. 70. 著者 Shehāb al-Dowle は, Emām Qolī Khān Eqbāl al-Dowle の孫にあたる (図2参照)。
- 12 Nikitine, p. 77; TAF 93. (ナーデル・シャー死後の Mahdī Khān Qāsemlū のオルミーエ帰還)
- 13 三書に共通するティームールが七年戦役からの帰途, Gorgīn Beyg Ūşālū をオルミーエ知事に任命したという記述である。Nikitine ではこの人物はアフシャール部に属していることになっており, オルミーエのアフシャール部の起源に関する伝承として扱われており, V.Minorsky, M.F.Köprülü, P.Oberingらはこれを踏襲している。しかし, TAF 校訂本および Dehqān では, この Gorgīn Beyg には Afshār というニスバはない。Nikitine において, この記事ののちに大きな欠落があること, 史料の構成の上でアフシャール部到来以前のオルミーエに関する部分となっていることを考えると, この人物をアフシャール部と考える必要はない

- (Nikitine, p.71; V. Minorsky, "URMIYA" in *the Encyclopaedia of Islam*, Leiden, 1913-1938, rep. 1993, vol.4, p.1034; M.F.Köprülü, "AFSHAR", in *the Encyclopaedia of Islam*, New Edition, Leiden, 1960-, vol.1, p. 240; P.Obering, "AFSHAR", in *Encyclopaedia Iranica*, London, 1982-, vol.1, p. 583)。
- 14 M.F. Köprülü, "AVŞAR" in *İslam Ansiklopedisi*, İstanbul, 1965-86, cilt. 1, s.28-32; F.Sümer, *Oğzular (Türkmenler)*, Ankara, 1967.s. 256, 261, 281-283. ; F. Sümer, *Safevî Devletinin Kuruluşu ve Gelişmesinde Anadolu Türklerin Rölü*, Ankara, 1976, pp. 83-84.
 - 15 TAA 140; 羽田正「シャー・タフマースプのキジルバシ政策」『オリエント』第 30 巻第 2 号 (1987 年), 35 頁 ; Sümer, *Safevî Devletinin*, s.98-100.
 - 16 TAA 457-8, 500, 524; TA 127-129.
 - 17 羽田正「シャー・アッパースの改革とコルチ」『西南アジア研究』第 23 号 (1984 年), 36 頁。
 - 18 TAF 10, 16-18, 36-48. なお, Dehqān も同様のエピソードを伝えている (s.367-8)。
 - 19 TAA 661-662, 1006-1007, 1018-1019, 1035. なお, Kasravī は, これらの記事を引用したのち, Qāsem Solṭān がモスル陥落後, オルーミーエに敗走したことがこの地のアフシャール部の起源であるとしており, Köprülü, Obering らもこれを踏襲している (Sayyed Aḥmad Āqā Tabrizī (Kasravī), "Īl-e Afshār", *Āyande* 2 (1306Kh) s.601; Köprülü, "AVŞAR", s.34; Obering, *op. cit.*, p. 583)。また, Takash も同様に Qāsem Solṭān がオルルーミーエを住地として選んだとする ('Alā al-Dīn Takash, "Qāsem Khān dar ra's-e īl-e Afshār", *Armaghān* 27-4/5 (2037Sh), s.262)。しかし, これらは何の史料的根拠も挙げておらず, ここでは TAF に従う。ちなみに Nikitine は TAF と同様のエピソードを伝えるがオルルーミーエ移住の年代を 998/1589-90 年とする。これでは Nikitine 自身が認めるように TAA の記述と一致しない。
 - 20 TA 414, 417. なお, TA 刊本では ŞDMRH や ŞDMRD となっており, British Library 写本 (Add. 27241) も ŞDMRD, ŞDMZD となっているが, Hamadān, Khorram-ābād, Nehāvand 方面であることから Şeymare に訂正する。
 - 21 TAA 1018.
 - 22 TAA 1035.
 - 23 TAA 1085.

- 24 Dehqān, s.368. なお、この勅令の引用では「自らの一族郎党 (il va ūlūs) をホラーサーンの Abivard からアゼルバイジャンのオルミーエと Saldūs の方へ移すよう」命じており、これに従うなら彼の一族はホラーサーンで生活していたことになる。
- 25 TAA 1085.
- 26 *Tazkirat* 72 では2,200人、*Alqāb* 105 では、1,980人。
- 27 A. Dupré, *Voyage en Perse fait dan les annéé 1807, 1808 et 1809*, Paris, 1819, tom. 2, p. 457. アフシャール全体で88,000、うち、オルミーエが最大で25,000 (28.5%)、ついでKhamse, Khūzestān がそれぞれ10,000 (11.4%)。なお、人口については3章1節も参照。
- 28 AN 183 には、オルミーエが Ganj ‘Alī Khān Afshār の「トユールの地 (maḥal-e toyūl-e ū)」と明記されている。*Tazkirat* 72 にも「国境のアミール達の俸給とトユール」の一覧に、アフシャール部の知事 (ḥākem-e olkā-ye il-e Afshār) が見える。
- 29 *Tazkirat* 72 では7,390 tomān 3,747 dīnār, *Alqāb* 105 では7,690 tomān 6,746 dīnār。
- 30 Perry の部族移住の分類によれば“cossackization”にあたる (J.R.Perry, “Forced migration in Iran during the seventeenth and eighteenth centuries”, *Iranian Studies* 8 (1975) p. 205)。
- 31 TAF 47-48.
- 32 HS 173; ZAA 138.
- 33 QKh 351, 353; AN 114, 128.
- 34 AN 183.
- 35 AN 183.
- 36 AN 329-330.
- 37 *Alqāb* 105. なお、*Tazkerat* の記述については注28参照。
- 38 たとえば、ANN 397; JN 425-6 など。
- 39 TAF 63-63. なお、TAF ではこの際、beyglerbeygī 職も授けられたとされているが、同時代史料でアフシャール部の知事は単に ḥākem と呼ばれる場合が多く、確認できない。
- 40 Ismail Asim Küçük Çelebi-zade, *Tarih-i Rasid*, cilt. 6, İstanbul, 1282 A.H., s. 328; F. Zarinbaf-shahr, “Tabriz under Ottoman Rule (1725-30)” (Ph.D. Dissertation, University of Chicago, 1991) p. 26. もっとも、これは

- アフシャール部にとっては不名誉であったのか、TAF では、Moḥammad Qāsem Khān はオスマン朝軍との戦闘に敗れ、城塞に籠ったのち、オスマン朝の計略によって謀殺されたとされている (TAF 70-72)。
- 41 行政便覧のなかに名前がある (*Alqāb* 105)。
- 42 Mustafa Sami ve Hüseyin Şakir ve Mehmed Subhi, *Tarih-i Sami ve Şakir ve Subhi*, İstanbul, 1198A.H., 34b-36b; TAF 79-81.
- 43 AAN 135-136, 141, 159; JN 134; TAF 78.
- 44 ホラーサーンのアフシャール部は、AAN 4-5 ではシャー・エスマーイール時代、JN 26-27 ではシャー・アッパース時代にアゼルバイジャンから移住させられたという。注 24 も参照。
- 45 AAN 135.
- 46 TAF 86-87. ただし、同時代史料で確かめられるのは、Moḥammad Qolī Khān Arashlū が Sar Keshīkchī-bāshī であったことのみである (注 50 参照)。また、TAF では Faṭḥ ‘Alī Khān Cherkhchī-bāshī という人物をオルミーエのアフシャール部の出身で、オルミーエ知事を務めた Faṭḥ ‘Alī Khān Arashlū と同一視している。しかし、AAN によれば Cherkhchī-bāshī を務めた Faṭḥ ‘Alī Khān はホラーサーンのアフシャール部の出身であり、ナーデル・シャーの義理の兄弟にあたる (AAN 1039)。同様の混乱は、1163/1750 年に Faṭḥ ‘Alī Khān Afshār-e Orūmī がアフシャール朝のシャーロフ・シャーとともにマシュハドにいたとする *Tārīkh-e Aḥmad Shāhī* の記述にも見られる。TAF や他の史料によれば当時オルミーエの Faṭḥ ‘Alī Khān はオルミーエに滞在していたはずである (Maḥmād b. Ebrāhīm al-Jāmī, *Tārīkh-e Aḥmad Shāhī*, Moskow, 1974, jeld-e avval, s. 194)。
- 47 JN 134-5; TAF 78. JN の記述によれば、ナーデルの故地 Kūbkān 周辺の Qerqlū 族をマシュハドに移動させ、かわりにファールス、エラールグ、アゼルバイジャンから集めた Qerqlū 族 2,000 家族を同地に移住させ、さらに残りのアフシャール部族 10,000 家族を付近の Kalāt に移したという。
- 48 AAN 251
- 49 TAF 92
- 50 JN 425-426; AAN 1125.
- 51 TAF 93-102; *Tajrebat* I 489; MT 31.
- 52 *Tajrebat* I 491-493; TAF 107-112. なお、Perry は、アーザード・ハーンと Naqī Khān がタブリーズの Mahdī Khān を攻撃し、敗ったとしているが誤りで

ある (J.R.Perry, *Karim Khan Zand: a history of Iran, 1747-1779*, Chicago & London, 1979, pp.48-49)。

- 53 TAF 114; GM 67. なお、彼はガージャール軍がオルミーエを征服した際に捕らえられ多額の身代金を取られたのち、マーザンダラーンへ流刑され、ここで没した。
- 54 アーザード・ハーン政権については、Perry, *op.cit.* pp.48-61, 79-94: 小牧昌平「ザンド朝の成立過程について」『上智アジア学』5号 (1987), 35-37頁。
- 55 GM 121, 143; TAF 138-145. カラ・バーク遠征については、Mirzā Jamāl Javānshir Qarā-bāghī, *Tārīkh-e Qarābāgh*, Bākū, 1959, ʃ.18-19.
- 56 *Tajrebat* II 39-41; GM 177-187, 192-196, 218-219; TAF 153-158, 163.
- 57 TAF 172, 178.
- 58 TAF 202.
- 59 *Tajrebat* I 84-85; TAF 220-221.
- 60 TAF 223-229, 232-234.
- 61 18世紀の諸勢力の権力闘争に関しては、小牧昌平「ザンド朝の成立について」および「18世紀末イランの諸群雄——カージャール朝前史の基礎データ」『上智アジア学』
第8号 (1990年) 78—92頁。ヤズドの事例として拙稿「ヤズドのモハンマド・タギー・ハーンとその一族」8—11頁。
- 62 GG 333-334; TM 194-195; RS IX 236, 324-328; NT 94-95; TAF 261-264, 286-298.
- 63 TAF 262, 267, 300
- 64 jam'-bandī の例として、TAF 365, 395, 408. moḥāsebe の例として、TAF 360-361; TN 197.
- 65 TAF 342-343. 税額は現金 27,000 tomān, 穀物 7,000 kharvār と決定した。
- 66 TAF 363-365. この時の税額は現金 71,000 tomān, 穀物 7,000 kharvār.
- 67 Qāyem-maqām Farāhānī, *Monsha'āt-e Qāyem-maqām Farāhānī*, bekūshesh-e Sayyed Badr al-Dīn Yaghmā'ī, Tehrān, 1373, ʃ.122-123.
- 68 TAF 392, 393.
- 69 TAF 418, 429, 451, 495. Beyglerbeygī と呼ばれる Najaf Qolī Khān, Jahāngīr Khān が知事の代理を務めていることは、その立場を示すものとして興味深い。
- 70 TN 142. この時の他の知事職の相場は、Marāghe 10,000, Khoy・Ardabīl 8

- れぞれ 5,000, Marand・Sāvojbolāq それぞれ 15,000 トマーン。ガージャール朝における売官の例としては、もっとも古いものに属する。
- 71 TN 155, 169. TAF 414-416.
- 72 TAF 430-431, 450-451, 513-520.
- 73 アッパース・ミールザーの軍制改革については, J.Calmard, “Les réformes militaires sous les Qājār (1794-1925)”, Y.Richard ed. *Entre l’Iran et l’Occident*, Paris, 1989, pp. 20-25.
- 74 TAF 343, 347, 446.
- 75 MS 161, 260, 275, 348, 370-371; TAF 259, 262, 267, 276, 281, 301, 305, 324, 350, 352, 355, 359, 371, 381.
- 76 このときの関係文書が, Jahāngīr Qā’em-maqāmī, *Yek šad o panjāh sanad-e tārikhī az Jalāyeriyan tā Pahlavī*, Tehrān, 1348Kh, ʃ.111-124 に収められている。
- 77 知事職関係 TAF 259, 281, 302／オルーミーエでの行動 TAF 395-396, 415／西部の統治権 TAF 270.
- 78 RS X 538; TAF 418, 423, 436.
- 79 RS X 538, 783-788; MB 1225, 1293, 1532; MN 1802.
- 80 MB 1047, 1281; MN 1798; TAF 446, 457, 479, 481, 499, 504.
- 81 TAF 450-1, 501; MB 1616, 1914.
- 82 たとえば, Qāsemlū 族の Jamshīd Khān Majd al-Saltane (図 2) は, Amīr-e tomān 位を得てアゼルバイジャン知事となり, 立憲革命期および, 第一次世界大戦中, 国境を越えて侵入してきたオスマン軍と戦った。Īmānlū 族の ‘Abd al-Šamad Khān ‘Azīm al-Saltane (図 3) は, やはり, アフシャール連隊の出身で, 第一次大戦中のアッシリア人の蜂起の際にはオルーミーエの知事として鎮圧に努めた (Dehqān, ʃ.248, 250, 417, 527; Nikitine, p. 107-8; Aḥmad Kāvi-yānpūr, *Tārikh-e Rezā’yye*, Tehrān, 1344Kh, ʃ.285-287)。
- 83 TAF 24-32, 33-35; TAA 795-802, 807-811.
- 84 Moḥammad Mofīd Mostowfi Yazdī, *Mokhtaṣar-e Mofīd*, ed. Seyfeddin Najmabadi, Wiesbaden, 1989, ʃ.178.
- 85 Mīrzā Moḥammad Ḥoseyn Mostowfi, “Āmār-e māli va nezāmī-ye Īrān dar 1128”, be-kūshesh-e Moḥammad Taqī Dāneshpazhūh, *Farhang-e Īrān-zāmīn* 20 (1353Kh), ʃ.412.
- 86 G.N. Curzon, *Persia and Persian Question*, London, 1892, rep. 1966,

- vol.1, p. 536.
- 87 M. Wagner, *Travels in Persia, Georgia and Koordistan*, London, 1856, vol.3, p.234; A.V.W. Jakson, *Persia, Past and Present*, London, 1906, pp. 104-105.
- 88 TAF 49; Dehqān, ʃ.369; F.Sümer, *Safevî Devletinin*, s.192-194. Qāsemlū 族については, Qāsem Soltān Īmānlū の子孫であるという説があるが (Takash, "Qāsem Khān", ʃ.262, 266; Obering, *op. cit.* p. 583), 史料的根拠がないのでここでは TAF に従う。Kohkelū は Kūhgīlūye の出身を示すものか。
- 89 TAF 95.
- 90 TAF 415.
- 91 Modarresī 149-150. この職と俸給はファトフ・アリー・シャーにも追認され, 死後, 俸給のみ相続人に相続された。ただし, 1255/1839 年で俸給は現金 42 tomān 5000 dinār となっていた (Modarresī 150-151.)
- 92 TAF 223.
- 93 TAF 201.
- 94 Moḥammad Qāsem Khān の母, Ḥoseyn Qolī Khān の母及び妻の一人はいずれも Bārāndūz の Khalaj 族の出身である。さらに, TAF は Khalaj 族の者を「Beyglerbeygī の一族 (aqvām) である」と述べている (TAF 68, 218, 378, 381)。
- 95 この権力闘争は Donbolī 族内の対立をも巻き込んで, 激化した (TAF 239-253)。
- 96 TN 169.
- 97 *Seyahatname* 286-304. なお, Minorsky はエヴリヤー・チェレビー訪問時のオルミーエ知事の名を不明としているが (Minorsky, *op.cit.*, p.1034), *Seyahatname* 294, 295 の記述により Ganj 'Ali Khān であることは明らかである。
- 98 TAF 8, 49. なお, 位置としては現存するオルミーエ郡の同名の村がこれにあたる (Moḥammad Ḥoseyn Pāpolī Yazdī, *Farhang-e ābādā va makānhā-ye mazhabī-ye keshvar*, Mashhad, 1367Kh, ʃ.151)。tūprāq とはトルコ語で「土」の意。
- 99 *Seyahatname* 299-300.
- 100 TAF 55, 57-58.
- 101 TAF 55.
- 102 *Seyahatname* 300-301.

- 103 羽田正 「「牧地都市」と「墓廟都市」——東方イスラーム世界における遊牧政権と都市建設」『東洋史研究』第49巻第1号（1990年）、1-29頁。
- 104 *Seyahatname* 301 には集会モスク7、ハンマーム3つの名が挙がっているが、そのうち、パシャ、シェイフの名がつくものがそれぞれ2、チャラントルが2、ダールーゲが1ある。
- 105 TAF 158, 168, 170.
- 106 TAF 288, 343.
- 107 TAF 159.
- 108 TAF 180.
- 109 TAF 172, 178, 182.
- 110 TAF 197.
- 111 TAF 197.
- 112 TAF 421 462.
- 113 Modarresī 152-170. 年金の額は、1276/1859-60年で現金21 tomān、穀物10 kharvār, 1302/1885年で現金3 tomān, 穀物11 kharvār であった。
- 114 Kāviyānpūr, *Tarīkh-e Reẓā'yye*, s.277.
- 115 J.B.Fraser, *Travels in Koordistan, Mesopotamia, etc*, London, 1840, vol.2, p. 57.
- 116 M.Shiel, *Glimpses of Life and Manners in Persia*, London, 1856. pp. 334-5.
- 117 すでに、坂本勉氏がガージャール朝期に遊牧民が兵役との関連で特定の都市に居住し、関係を深めていったことを指摘している（坂本勉「19世紀イスファハーンの都市構成とメイダーン（Ⅱ）」『史学』51巻1/2号（1981年）、154頁）。
- 118 TAF 357, 395, 514.
- 119 TAF 514.
- 120 TAF 49. Dehqān もほぼ同様の記述である（s.379）。
- 121 Ḥasan Qarākhānī, "Boq'e-ye Ayyūb-e Anṣārī dar Takāb: farāmīn-e shāhān-e Ṣafavī dar bāre-ye mowqūfāt-e ān", *Barrasīhā-ye tārīkhī*, 9-1 (1353Kh) s.73-122.
- 122 現在、Miyāndoāb 郡の Sārīqūrkhān 村にその名を残す（Pāpolī Yazdī, *Farhang*, s.299）。
- 123 文書には「この地方の Kadkhodā 達と臣民達はここに記されているように彼が自らの malek であり、長（rīshsefid）であることを知り、彼の信頼できる言葉や

- 行動に反するべからず。また、彼の知らないところで、勝手なふるまいをするべからず。」とある。サファヴィー朝期のアゼルバイジャンの malek の他の例は、A.K.S. Lambton, *Landlord and Peasant in Persia*, London, 1968, rep. 1991. p. 110-111 参照。
- 124 文書の校訂はこうになっているが、表1の通りこの名の知事は TAF には見られない。付されている文書の写真も残念ながら不鮮明で判読不能である。
- 125 A. Amanat ed. *Cities & Trade: Consul Abbott on the economy and society of Iran 1847-1866*, London, 1983, p. 230.
- 126 TAF 414, 416, 478, 495.
- 127 TAF 49.
- 128 Shiel, *op. cit.*, p. 396.
- 129 Wagner, *op. cit.*, vol.3, p.242.
- 130 TAA 1087; *Tazkerat* 72; *Alqāb* 106; M-J. D. Good, "Social hierarchy in provincial Iran: The case of Qajar Maragheh", *Iranian Studies* 10 (1977), pp.129-163; "The changing status and composition of an Iranian provincial elite", in *Modern Iran: dialect of continuity and change*, ed. by M. Bonine & N. Keddie, Albany, 1981, pp. 269-288, 432-434.
- 131 Amanat ed., *op. cit.*, p. 213.
- 132 その分布図として Tapper, *op. cit.*, p. 510-511, Map 11.